

一九一〇年代の朝鮮における新文館の児童雑誌

——日本の児童文學界と崔南善——

田 中 美 佳

はじめに

- 一 児童雑誌の刊行の背景と崔南善の児童観
 - (一) 各刊行物の概説
 - (二) 児童雑誌の企劃とその背景
 - (三) 新文館の目指した児童教育
 - 二 日本の刊行物との影響関係
 - (一) 崔南善の日本滞在と當時の児童文學界
 - (二) 教訓の要素を含んだ童話
 - (三) 「子どもらしさ」を表す構成物
 - 三 児童雑誌にみる「朝鮮的なもの」
 - (一) 朝鮮の昔話や人物等の紹介
 - (二) ハングル表記と固有語の創造
 - 四 児童雑誌から「總合教養」雑誌『青春』へ
 - (一) 『アイドゥルボー』第一三號について
 - (二) 『セビョル』について
- おわりに

はじめに

出版社新文館は、近代朝鮮の出版文化史研究において最も注目される存在である。三・一獨立宣言書の起草者でもある、當時を代表する知識人であった崔南善（一八九〇～一九五七）が一九〇八年に漢城（現・ソウル、植民地期は京城）に設立したことに加え、「近代雑誌の嚆矢」といわれる『少年』（一九〇八年一月～一九一一年五月、通卷二三號）と一九一〇年代に人氣を博した「總合教養」雑誌『青春』（一九一四年一〇月～一九一八年九月、通卷一五號）という朝鮮出版文化史に名を残す雑誌の發行元だからである。本稿では、これらの代表的なふたつの雑誌の間の期間に刊行された兒童雑誌を取り上げる。

新文館は『少年』廢刊後に『붉은 저고리（赤いチョゴリ）』以下『赤いチョゴリ』と表記』（一九一三年一月～一九一三年六月、通卷一一號）、『아이 들보이（子どもの讀み物）』以下『아이 드울보이』と表記』（一九一三年九月～一九一四年一〇月、通卷一三號）、『새별（新しい星）』以下『세비올』と表記』（一九一三年九月～一九一五年一月、通卷一六號）と相次いで兒童を對象とした刊行物を出版する。『少年』の讀者にも兒童は含まれたと思われるが、同誌は幅廣い年齢層を對象としていた。^① それに對し、これらの雑誌は明確に兒童に焦點を當てたものであった。

そのため、これらは現在、朝鮮兒童文學史の出發點に位置づけられている。しかし、『少年』および『青春』が、民族意識の涵養や近代的知識の普及といった民衆啓蒙の面で果たした役割が大きいつつ注目されてきた一方で、兒童雑誌はこうした啓蒙の要素の稀薄さも指摘され、^② 史料の制約もあつて焦點が當てられてこず、近年にいたるまでほとんど研究がなされてこなかった。^③

また、先行研究では主に韓國の兒童文學研究者が各刊行物の内容分析や兒童文學史における意義の考察に取り組んできたが、^④ 史料の制約もあり、刊行の時期や編集に携わった人物といった基本的なことすら不明瞭なままになっている。さらに、掲載作品の出版や植民地化されて間もない當時の時代状況、他國の影響といった出版をとりまく外的條件を考慮して

いないため、これらの刊行物の全體像については依然として多くの謎が残されている。

出版社新文館の實態を明らかにするうえで、主力であった雑誌事業に着目する必要があるが、とくに児童雑誌は、現刊行が確認されている新文館の雑誌全七八號中四〇號と約半數を占め、看過できない存在である。また、従来は『少年』と『青春』のみを取り出して兩者の關係性が論じられてきたが、その間に刊行された児童雑誌が『青春』の成立に何かしらの影響を與えた可能性もあるだろう。

そこで本稿では、新文館が一九一〇年代に着手した児童雑誌について、まず當時の朝鮮の出版をとりまく状況の分析ならびに崔南善が児童に着目するにいたる過程の考察を通し、刊行の背景をたどる。そのうえで、これらの雑誌がどのようにして成立したのか、掲載作品の出典を明らかにしたうえで、同時期の日本の児童文學界との影響關係を考慮して詳細に分析する。

さらに、これらの雑誌の特徴的な點といえる、朝鮮の昔話や人物等の紹介、ハングル表記といった「朝鮮的なもの」の⁵⁾掲載にも着目して分析することで、これまで明らかにされてこなかった一九一〇年代における新文館の児童雑誌の實態に迫りたい。

なお、『セビョル』は史料の現存状況がきわめて悪く、また『赤いチョゴリ』や『アイドウルボーイ』とはやや性格が異なり、一概に児童向けとは言い難い面もある。よって、本稿では『赤いチョゴリ』ならびに『アイドウルボーイ』を分析の中心にすえ、『セビョル』に関しては、本稿で明らかにしたことをふまえ最後に簡単に言及することとした。

一 兒童雜誌の刊行の背景と崔南善の兒童觀

(二) 各刊行物の概説

新文館が兒童雜誌を出していたという事實自體は知られていても、『赤いチョゴリ』と『アイドルボーイ』の詳細はあまり知られていないため、まず各刊行物の概要を説明しておく。

新文館がはじめて出版した兒童向けの定期刊行物が、一九二三年一月創刊の『赤いチョゴリ』である。タブロイド版の新聞形式で八面、各面四段で構成され、毎月一日、一五日に發刊された。⁽⁶⁾ 詩人の金興濟（一八九三〜？）が編集したとされるが、原稿はほぼ崔南善が擔當したと思われる。⁽⁷⁾⁽⁸⁾

『赤いチョゴリ』を着た人たち⁽⁹⁾を對象とし、掲載内容は「詩歌」「古談」「童話」「寓語」「訓話」「史談」「學藝」「의사모기（考えてみよう）」「物類畫說」「笑話」「戲畫」「插畫」等であった。⁽¹⁰⁾ 『赤いチョゴリ』は朝鮮で最初の兒童用定期刊行物とみなされ、⁽¹¹⁾ 崔南善自身の回想によると『少年』、『青春』以上の發行部數を記録したという。⁽¹²⁾ しかし、朝鮮總督府より停刊處分を受け、實質的に第一一號（一九二三年六月一日）が最終號となった。⁽¹³⁾

その三箇月後の一九二三年九月に創刊されたのが『アイドルボーイ』である。大きさはほぼ菊判で、每號四〇頁程の月刊誌であった。掲載物にはほとんど筆者名が記載されていないが、大部分は崔南善によるものであるとされる。⁽¹⁴⁾

『朝鮮の百萬の子どもたち』を對象とし、⁽¹⁵⁾ 「小説」「古談」「教訓」「學藝」「傳記」「遊戯」等で構成されていた。⁽¹⁶⁾ 題目および内容がほぼすべてハングルで表記されているという點が特徴的であり、母音と子音で構成されているハングルをローマ字のように分解し、並べて書く「한글놀이（ハングルブリ）」も試みられている。

『赤いチョゴリ』と構成が類似しているが、『アイドルボーイ』の創刊號（一九二三年九月）に「今回新しい姿で再び皆

さんのお目にかかる機会が生じ」とあるように、同誌は『赤いチョゴリ』を引き継いだものであったといえる。兩誌ともに挿繪が多用されており、韓國では、朝鮮における繪本の起源とも評される。⁽¹⁸⁾

(二) 兒童雜誌の企劃とその背景

このように『赤いチョゴリ』と『アイドゥルボーイ』は、朝鮮における近代兒童文學の嚆矢と評價されている。⁽¹⁹⁾ 實際、當時の朝鮮では、兒童文學のジャンルどころか「兒童」という言葉自体がまだ使われるようになって日が浅かった。⁽²⁰⁾ そのような状況下において、新文館の兒童を對象として出版物を出すという發想自体が、非常に目新しく劃期的なものであったといえる。

そのことは崔南善自身も自覺していたようである。たとえば『赤いチョゴリ』の廣告には「兒童文學の先驅」とあり、⁽²¹⁾ 刊行の辭では「文明的な國」には一定の水準に達した新聞がさまざまにあり勉強の大きな助けになっているが、「未だ私たちの社會にはそれに該當する適當な機關がない」と述べている。⁽²²⁾ さらに、「まだ朝鮮の子どもたちはこのようなものを見る習慣がなく、はじめは難しく感じたり面白くないと思ったりするかもしれない」と前置きするなど、⁽²³⁾ 朝鮮においていかに目新しい試みであるのかについて自ら言及している。

では、新文館はなぜ前例のない兒童に向けた刊行物に着手するようになったのであろうか。

まず、當時の朝鮮の置かれた状況からみていきたい。一九一〇年八月の韓國併合にともない、一〇年代の朝鮮では朝鮮總督府の武斷政治の政策によって朝鮮人の言論・集會・結社の自由が大幅に制限されていた。

植民地期の朝鮮人による定期刊行物には一九〇七年七月に制定された新聞紙法が適用されたが、併合直前に刊行された『少年』第三年第八卷（一九一〇年八月一五日）が、併合條約調印直後に「治安ヲ妨害スルモノ」として「新聞紙法第二十一條」により停刊處分を受けるなど、⁽²⁴⁾ 新聞紙法の運用は併合を迎えより厳しくなった。そのため、一〇年代の武斷政治下

で発行された雑誌は、「治安ヲ妨害スル」恐れのない純粹な學術または宗教關聯のものが大多數だったのである。⁽²⁵⁾

崔南善は雑誌『少年』において、朝鮮が保護國化され併合が目前に迫るなか、このような國家的危機に耐え國の將來を擔いうる屈強な人物を養成しようとしていた。崔は「一人で肩に重い荷物を背負えるように教導すること」を『少年』の刊行目的に掲げ、幅広い年齢層を讀者として想定しさまざまな面からの啓蒙を試みたが、とくに愛國心や強い心の涵養といった精神修養を重視していた。⁽²⁶⁾ 實際、併合以前の『少年』にはこうした觀點から民衆を啓蒙しようとしたものが多數掲載されている。

例を挙げると、第三年第七卷（一九一〇年七月）には『レ・ミゼラブル』のなかの革命に焦點が當てられた部分が翻譯掲載されているが、掲載理由として「革新時代の青年の心理」を描いており、「我々も知るべきことがたくさんある」と説明している。⁽²⁷⁾ 實際に内容をみると、革命のために命懸けで闘う「青年學生」の様子が描かれている。また、併合直前の第三年第八卷には抗日運動家の申采浩（一八八〇～一九三六）が一九〇八年に發表した「讀史新論」が轉載されているが、⁽²⁸⁾ 「祖國の歴史を最も憂え、眞實と正しさを求め再び聲を上げて誠意を盡くした一人の少年（おそらく申采浩を指すと思われる―筆者）の心の叫び」として載せたという。⁽²⁹⁾

つまり、併合以前は誌面上に民族意識や現状を變革しようとする意識の昂揚につながるような内容がみられたが、『少年』第三年第八卷が併合條約調印直後に停刊處分を受けたように、こうした内容は「治安ヲ妨害スル」ものとして取り締まられるようになったのである。

なお、『少年』の停刊處分は三カ月後の一九一〇年十二月七日に解除される。その約一週間後の十二月一日に刊行された第三年第九卷の内容をみると、トルストイに關する紹介やその文學作品の純粹な翻譯を中心に構成されており、民族意識を鼓舞するようなものは含まれていない。つまり、崔南善は檢閲を意識して従來の精神修養の内容を意圖的に避けたとも考えられよう。その結果、『少年』の内容が「治安ヲ妨害スルモノ」に反しないということが朝鮮總督府の事前檢閲

によって確認され、發禁が解かれた可能性が高いといえる。

一方、最終號となった第四年第二卷（一九二二年五月）は、獨立運動家である朴殷植（二八五九～一九二五）の「王陽明先生實記」がほぼ全頁を占めている。これは陽明學の實踐的行動を民族運動に利用すべきと説くものである。しかし、おそらくこの點が新聞紙法の治安條項に抵觸し、『少年』は同號で廢刊處分を受け、その後復活することはなかった。要するに、第三年第九卷で發禁處分が解かれた『少年』は、第四年第二卷で再び以前のように精神修養を圖る路線に戻したのであり、その結果、同號で廢刊になってしまったといえるだろう。

また、崔南善が精神修養を圖ろうとしたことに加えて、一九二一年半ば頃から朝鮮總督府の治安認識が變化したことも、『少年』の廢刊の背景として考えられる。寺内正毅總督は、大きな武力抵抗を招くことなく韓國併合を實現したため、併合當初は治安の前途に一應の安心感を抱いていたようだが、安嶽事件（一九一〇年二月）や一〇五人事件（一九二一年九月檢舉開始）といった祕密結社檢舉事件により、朝鮮人の民族運動に對する警戒を強めたといわれる。⁽³²⁾ こうした統治側の治安認識の變化も『少年』廢刊の要因のひとつに挙げられよう。

以上のような當時の朝鮮總督府の言論統制の状況に鑑みるならば、新文館は檢閲によって發禁處分なることを避けるために、一見すると「治安ヲ妨害スルモノ」とはほど遠い兒童向けの刊行物に着目するようになったことがまず考えられよう。實際に、『赤いチョゴリ』は「皆さんが見て聞いて學び遊ぶ手助け」を發行趣旨に掲げ、創刊號（一九一三年一月）の表紙に「勉強と遊びの泉」と明記するなど、あくまで子どものための讀み物であるということを強調している。

そしてもうひとつ着目すべきは、當時の朝鮮における出版業をとりまく經濟的な問題である。たとえば『少年』第三年第八卷において、崔南善は讀者に當時の状況下での「着實な出版事業」というものがどれほど困難であるかを訴え、「今は大部分が金の世の中であり、このような状況でできるはずのことも十分にできず、恨めしいことこの上ない」として「眞實な購覽者」の紹介に力を注いでほしいと讀者に懇願している。⁽³⁴⁾ 『少年』は創刊から一年ほど経つてようやく數百部が

發行されるようになったが、雑誌の売り上げだけで刊行を維持するには厳しい経済的状況にあったことが推測される。

これと關聯して目を向けたのが、當時の教育制度である。『赤いチョゴリ』が創刊された一九一一年、朝鮮では朝鮮總督府によって朝鮮教育令および關聯法規が相次いで公布され、とくに普通教育の普及が進みつつあった。九〜一二歳の兒童が通う公立の普通學校（日本の尋常小學校に相當する）に關していえば、一九一二年の時點で三三〇校ほど存在し、入學者數は約一八〇〇〇人にのぼった。これ以降繼續して入學志願者數が入學者數を上回る状況にあり、このように近代的な學制が整うにつれて兒童に向けた教育の需要が高まっていたと思われる。

このような状況のなか、経済的な問題を抱えていた新文館は需要を見込んで兒童向けという新たな事業に取りかかったということも考えられよう。實際、『赤いチョゴリ』と『アイドゥルボーイ』には普通學校の兒童に向けた記事が數多く載っている。

（三）新文館の目指した兒童教育

では、新文館は具體的にどのような讀者を対象とし、またいかなる志を掲げて兒童雑誌を出していたのであろうか。

『赤いチョゴリ』や『アイドゥルボーイ』が明確にどのような年齢層を対象としていたのかは明記されていないが、まず『赤いチョゴリ』には、讀者に對する「皆さんには愛で育ててくださる両親、愛で導いてくださる先生」⁽³⁶⁾がいて、大人に任せ、遊ぶ友達もいるとの記述がみられ、また誌面には「普通學校」に通う兒童が複数登場する。⁽³⁷⁾

同様に、『アイドゥルボーイ』にも「九歳の子ども」や「普通學校四年生」が登場し、「普通學校三年の修身の時間」を取り上げた箇所もみられることから、⁽³⁸⁾どちらも「普通學校」に通う九〜一二歳程度の兒童を対象としていたということが読み取れる。

とくに『赤いチョゴリ』は「幼い頃から正しい道と美しい方法で導き、またの日に完全な人をつく」⁽³⁹⁾ることを目標とし

て、「教訓になる話」や「品行の學びに有益な話」、「意義のある詩と歌」などを掲載すると述べている。⁽³⁹⁾

その一環として、崔南善による毎號聯載の「깨우쳐 들일 말슴(悟らせる言葉)」では、時を惜しむことや眞面目さの重要性、また人との信頼關係について説いたものなど、児童に向けたさまざまな道徳上の教育がなされている。そのなかでも、「남남(ナルナム、勇氣を意味する崔の造語)」の重要性を強調しており、「この世のものはすべて勇氣のある者が手に入る」として「勇氣を育て磨き、振りま」くことを推奨している。⁽⁴¹⁾『アイドルボーイ』でも、題目に「남남」という言葉が含まれた記事が複数掲載され、金徳齡や趙莫從、韓績、安景務、金汝物といった「남남」を有した力の強い人物が複数登場するなど、「남남」は崔が児童に對してとくに重視していたものと思われる。

これらより、崔南善が児童に求めていたものを察することができるが、とくに印象的なのが『アイドルボーイ』の「아이드신문(子ども新聞)」というコーナーにおける崔の讀者に向けた文である。ここで、崔は「若い時」は「すべてのことの土臺を作る期間」であり「體も丈夫で心も磨き知恵も十分でなければなら」ず、謙遜で熱心に學び、大きな實を結ぶ人になるべきであると述べている。⁽⁴³⁾さらには、「相當に體と心を鍛錬し困難に耐えまた耐え」ることの重要性を指摘し、「私たちはふるって努力すべきだ。磨き鍛錬せよ。いかなる困難にも耐えられる分耐えよ」と讀者に説いている。⁽⁴⁴⁾

このような、身心の鍛錬を重視し完全な人物の養成を目指す姿勢は、併合以前に屈強な「少年」の養成を目指した「少年」の試みを、対象年齢を引き下げながら引き継いだものであったといえよう。未來の大韓帝國の擔い手としての「少年」の養成は國が滅びたことにより挫折したが、植民地下における「児童」が新たな教育対象として見いだされたのである。屈強な人物の養成を目指して精神修養を圖る姿勢自体は、『少年』の頃から一貫しているといえる。

一方で、『少年』とこれらの児童雑誌とは、崔南善の児童に對する接し方に明確な違いがみられる。『少年』の創刊號には「輕軟なものを主張して兒童の好奇心と歡意に迎合し、さまざまな懸賞と抽籤を行って白紙のような兒心に虚欲と僥倖心を刻む」ことは「外國雜誌の通弊」であるとの指摘がみられ、⁽⁴⁵⁾内容も児童向けのものはほとんどみられないのに對し、

『アイドゥルボーイ』では懸賞がさかんに實施されているのである。⁽⁴⁶⁾

『赤いチョゴリ』も、「この新聞は子どもたちに見せるために出すものなので、大人が見ると非常につまらないと思うことも多いでしょうし、またくだらないもののように思われることもあるでしょう」との説明書きが示すように、⁽⁴⁷⁾誌面には影繪や數字遊び、一筆書きの繪や迷路などが複数掲載されている。

こういった要素は、児童が読みやすく、また興味を引くために取り入れられたものと思われる。とはいえ、前述したように「児童教育に對する深大な期待」⁽⁴⁸⁾をもつて児童雑誌を出していた新文館が重視していたのは、あくまで児童を屈強な精神を持った「完全な人」にすべく教育することであり、影繪や數字遊びといった要素は児童に接近するための手段として用いられたものであったといえよう。

こうした児童教育の手段として新文館がとくに重視していたのが童話である。崔南善は、一九二〇年代における『東亞日報』の記事において、童話は「實に智識増長、情操涵養、意志鼓勵のすべての效能を有する」として児童教育の「核心乃至全部」であると指摘し、『アンデルセン』、『ハウプ』、『グリム』、『ビョルンソン』を「次代主人」に提供すべく努力すると述べている。⁽⁴⁹⁾詳しくは次章で述べるが、崔の童話を重視する姿勢は一九一〇年代においても顯著にみられる。

以上のように、新文館は武斷政治下における檢閲を意識し、また出版不況のなか需要を見込んで新たに児童向けの刊行物に着手するようになったと思われる。併合前の「少年」に代わって併合後の「児童」が新たな教育対象として見いだされるようになったが、屈強な人物の養成を試みる精神修養の方向性は『少年』から一貫したものであったといえる。

では、新文館の児童教育の試みはどのようにして實現されていたのであろうか。次章では、當時の日本の児童文學界との影響關係を考慮しながら雑誌の内容を分析する。

二 日本の刊行物との影響關係

(一) 崔南善の日本滞在と當時の兒童文學界

新文館の兒童雜誌を分析するにあたって日本の兒童文學界に着目するのは、崔南善がこの時期日本に行き來しており、また實際に新文館初の刊行雜誌である『少年』に日本の文學界の影響がみられるからである。⁽⁵⁰⁾

崔南善は、一九〇四年と一九〇六年に二度日本留學を経験している。さらに一九一三年六月の『赤いチョゴリ』廢刊後にも東京に渡ったとされ、⁽⁵¹⁾ また『アイドゥルボーイ』第一〇號（一九一四年六月）には崔自身の「私は今東京にいます」との記述がみられることなどから、⁽⁵²⁾ 兒童雜誌を出していた一九一〇年代にも日本に足を運んでいたということがわかる。

當時の日本の兒童文學界に目を向けると、一九〇年前後に兒童雜誌が誕生し、一九〇〇年代にかけてお伽噺や童話集、兒童雜誌等が多數出版されていた。この頃日本に滞在していた崔南善がこれらの刊行物にふれた可能性は十分にある。⁽⁵³⁾

この時期の日本の兒童文學の特徴としては、兒童教育の補助として刊行物が出されたという點が擧げられる。たとえば、『少年園』（少年園、一八八八年一月〜一八九五年四月）は日本における「少年雜誌の嚆矢」、子ども向けの讀み物の先驅として知られている。主筆の山縣悌三郎（二八五九〜一九四〇）は、「今の少年諸君中小學の生徒諸子」に大きな期待をかけ、「少年書物、薰陶書籍」の少なさという「教育世界の一大缺點」を補おうと『少年園』の刊行にいたったという。⁽⁵⁴⁾ 實際に、同誌の發行の主旨では「教育の事は獨り直接なる學校教育の力に頼る可からず。家庭の教育も亦一大勢力なり、社會の教育も亦一大勢力なり。而して實に印行書類の教育に及ぼす力も是れ亦一大勢力なり」として、⁽⁵⁵⁾ 刊行物が教育に及ぼす影響力の大きさが強調されている。

同じく、新文館も兒童教育を補完するものとして刊行物を位置づけていたようである。『赤いチョゴリ』の主旨説明文

に「勉強というものは家庭や學校でさせるだけではなく、それ以外に非常に重要で重大なものがあるが、すなわち新聞や雑誌のようなものである」とあるように「新聞や雑誌」の重要性を認識し、また新聞を「家庭と學校では手が届かず」十分に果たせない部分を補完するものと定義している。⁽⁹⁶⁾

『赤いチョゴリ』の廣告に「兒童教育に適當な補助機關がないことを慨嘆し新文館より發行」との記述がみられるように、⁽⁹⁷⁾新文館は朝鮮に兒童向けの刊行物や兒童教育の補助機關がないことを嘆き、自ら兒童教育を擔當する第三の機關を負っていた。このような、兒童教育の補助としての刊行物の發行という發想は、日本の影響を受けたものであった可能性があるといえよう。

しかし、崔南善と當時の日本の兒童文學者とは兒童觀が異なっていた。たとえば、明治期を代表する兒童文學者である巖谷小波（一八七〇～一九三三）は、樂しみのなかに教育的な効果を期待し、遊びで子どもの豊かな成長を育むという發想を持っていた。⁽⁹⁸⁾また、「子供の天性」を重視し、「子供の時は子供らしく、子供としての天真を、遺憾無く發揮させる」ことを主張するなど、「子どもらしさ」というものを重視していたようである。⁽⁹⁹⁾

一方の崔南善は、先述のように『少年』においては「輕軟なものや」さまざまな懸賞と抽籤を批判し、「外國雜誌の通弊」として指摘しているが、この記述の箇所には「これは我々が外國にいる時に深く恨嘆したところ」と併記されている。崔が主に滞在していた「外國」が日本であったことを勘案すれば、この「外國雜誌」の「外國」とは日本を指すといえる。實際、崔は『少年』を刊行するにあたって小波の『少年世界』を参照していた。⁽¹⁰⁰⁾つまり、崔は小波の兒童觀をもとと認識しており、『少年』の頃はそれを否定していたとみることができるといえる。

『赤いチョゴリ』と『アイドゥルボーイ』では、一轉して迷路などの「子どもらしい」要素が含まれるようになるが、崔南善の目的は兒童を「完全な人」に教育することであり、小波のいう「子供としての天真」のようなものは重視していなかった。それゆえ、先述のように兒童に接近する手段として「子どもらしさ」を取り入れていたものと思われる。要する

に、崔南善と巖谷小波の児童観は異なるが、崔は新たに児童向けのものに取り組むにあたり、「子どもらしさ」をもって児童に接近するという小波と類似した方法をとるようになっていったのである。

以上より、一九一〇年代における新文館の児童向け刊行物への着手は、前章でみた當時の朝鮮の状況という内的条件に、日本の児童文学界の影響という外的条件が合わさった結果としてみる事ができる。

このような日本の児童文学界の影響というものは、刊行物自体にも及んでいる。次節以降、この点を考慮しつつ雑誌の構成要素をひとつひとつ取り上げて詳しくみていきたい。

(二) 教訓の要素を含んだ童話

新文館の児童雑誌には、アンデルセンやグリムといった童話の掲載がみられる。とくに、朝鮮においてはじめてアンデルセン童話を紹介したのはこれらの新文館の児童雑誌であったといわれ、朝鮮における外国児童文学の受容を考えるうえでも重要な存在である。しかし、これらの掲載童話が何をもとにしたものであったのか、すなわち翻譯の底本が何であったかは、特定が困難であるとして長い間解明されてこなかった。⁽⁶¹⁾

前述のように当時崔南善が日本に行き来しており、またすでに『少年』に日本の刊行物の影響がみられることを考慮し、當時の日本の児童向け刊行物と新文館の児童雑誌を比較検討した結果、【表1 翻譯作品の底本一覽表】のように多数の日本の刊行物を翻譯していることが明らかとなった。⁽⁶²⁾ 掲載童話もそのほとんどが日本の書籍や雑誌からの翻譯であり、『家庭お伽噺』、『世界お伽噺』、『新譯伊蘇普物語』等その種類は多岐にわたっている。

童話の底本を詳しくみていこう。まず、『赤いチョゴリ』に掲載されたグリム童話の底本は『家庭お伽噺』（小川尙榮堂、一九〇九年）である。同書は、「お伽噺」の価値を「何等か道徳上の印象を児童の腦裏に留むる」点に見出し、「少年子女に有益なるもの」を提供することを目的としたものである。とくに「頗る温健にして其中に有益なる思想を含蓄する」と

【表 1 翻譯作品의 底本一覽表】

작품名	翻譯底本	著者名
「마님의 간곳」『붉은 저고리』 第1年第1號, 1913.1. 3~5頁	「第四十三 姫の行方」『家庭お伽噺』 小川尚榮堂, 1909. 242~250頁	グリム原著 和田垣謙三 星野久成共譯
「네 아오동생」『붉은 저고리』 第1年第2號, 1913.1. 4~5頁	「第四十二 四人兄弟」, 同上, 237~242頁	同上
「우슴 거리 뒤편은 벽」, 同上, 7頁	「はなしのたね 後の方は壁」『日本少年』 第2卷第3號, 實業之日本社, 1907.3. 75頁	編集局選
「우슴 거리 과리 잡아」, 同上, 7頁	「はなしのたね 蠅を取ってゐる處」, 同上, 75頁	同上
「우슴 거리 동갑」, 同上, 7頁	「はなし의たね 同い歳」, 同上, 76~77頁	同上
「남생이와 독수리」『붉은 저고리』 第1年第4號, 1913.2. 6頁	「下篇 第五百十八 龜と鷲」『新譯伊蘇普物語』 鍾美堂書店, 1907. 231~233頁	上田萬年解説
「여호와 닭」, 同上, 6頁	「上篇 第七 鷄と狐」, 同上, 18~21頁	同上
「어이 종달새와 썩기 종달새」 「붉은 저고리」第1年第5號, 1913.3. 6頁	「上篇 第六 母雲雀と子雲雀」, 同上, 14~18頁	同上
「양의 가족을 쓴 이리」, 同上, 6頁	「上篇 第十五 羊の皮を着た狼」, 同上, 38~39頁	同上
「토끼와 개고리」『붉은 저고리』 第1年第6號, 1913.3. 7~8頁	「上篇 第六十六 兎と蛙」, 同上, 160~163頁	同上
「여호와 이리」, 同上, 8頁	「上篇 第六十七 狐と狼」, 同上, 163~165頁	同上
「숫 장수와 빨내장이」『붉은 저고리』 第1年第7號, 1913.4. 5~6頁	「下篇 第八八 炭焼夫と洗濯夫」, 同上, 85~87頁	同上
「락타」, 同上, 6頁	「下篇 第百廿三 駱駝」, 同上, 130~131頁	同上
「우슴 거리 동갑되겠다」, 同上, 6頁	「少年笑話 おない歳」『少年世界』第13卷 第13號, 博文館, 1907.10. 22頁	讀者投稿
「메와 농군」『붉은 저고리』 第1年第8號, 1913.4. 5~6頁	「下篇 第百三 鷹と農夫」 前掲『新譯伊蘇普物語』66~69頁	上田萬年解説
「구두쇠」『붉은 저고리』 第1年第9號, 1913.5. 7頁	「上篇 第四十五 守錢奴」, 同上, 110~113頁	同上
「고든 마음의 감흠」『붉은 저고리』 第1年第10號, 1913.5. 1頁	「上篇 第三十七 水神と樵夫」, 同上, 92~95頁	同上
「한머니와 중 아희」, 同上, 4頁	「上篇 第五十八 婆さんと下女」, 同上, 142~144頁	同上
「여호와 토끼」, 同上, 4~5頁	「上篇 第五十九 狐と兎」, 同上, 144~146頁	同上
「개와 여물통」, 同上, 5頁	「上篇 第四十六 犬と馬槽」, 同上, 113~115頁	同上
「말과 사자」『붉은 저고리』第1年 第11號, 1913.6. 4~5頁	「下篇 第八十一 馬と獅子」, 同上, 1~4頁	同上
「개미와 멧독이」, 同上, 5頁	「上篇 第七十四 蟻と蝨蜥」, 同上, 180~182頁	同上
「가막이와 공작」, 同上, 5~6頁	「上篇 第七十二 鴉と孔雀」, 同上, 173~176頁	同上
「사자 가족 쓴 나귀」, 同上, 6頁	「下篇 第九九 獅子の皮を着た驢馬」, 同上, 87~89頁	同上
「장기 네이가 님검님 똥싸인 이익이」 , 同上, 7頁	「將基の發明者國王を泣す」前掲『少年世界』 第14卷第9號, 1908.7. 102~104頁	横山又次郎
「우슴 거리 눈 나뭇」, 同上, 7~8頁	「話の種 目の霧」前掲『日本少年』 第4卷第3號, 1909.3. 76頁	讀者投稿
「우슴 거리 지구 도는 것을 보아」, 同上, 8頁	「話の種 地球の動くのが見える」, 同上, 77頁	同上
「우슴 거리 내 생일은 네해만쯤」, 同上	「話の種 誕生日は四年目毎」, 同上, 76~77頁	同上
「남생이 줄다리기」『아이들보이』 第1號, 1913.9. 2~11頁	「(上) 綱引の力」『世界お伽噺』第73編, 博文館, 1905. 1~22頁	巖谷小波編
「우슴거리 그것도 자랑」, 同上, 14頁	「少年笑話 やっぱり自慢」『少年』第116號, 時事新報社, 1913.5. 16頁	少年記者
「계집아이 슬기」『아이들보이』第2號, 1913.10. 1~13頁	「(下) 智慧娘」前掲『世界お伽噺』第7編, 1899. 55~82頁	巖谷小波編
「우슴거리 담배 열리는 나무」, 同上, 16~17頁	「少年笑話 煙草に成る實」前掲『少年』 第117號, 1913.6. 38頁	少年記者
「우슴거리 무을 하던 미안하겠기」 『아이들보이』第3號, 1913.11. 28頁	「少年笑話 甲を取れば氣の毒」, 同上, 37頁	同上
「우슴거리 구런내 내는 거울」, 同上, 28頁	「笑話 臭い鏡」『少年世界』第19卷第10號, 1913.7. 111頁	讀者投稿
「포레벌에 왕사람」, 同上, 29~32頁	「(二三) 沙漠の大男」『學校家庭 教訓お伽噺 (東洋之部)』博文館, 1912. 103~108頁	巖谷小波編
「평한 거울 셋」『아이들보이』第4號, 1913.12. 1~12頁	「(下) 三魔鏡」前掲『世界お伽噺』第4篇, 1899. 59~82頁	同上
「늑은이 보람」, 同上, 27~29頁	「(三六) 老人の手柄」前掲『學校家庭 教訓 お伽噺 (東洋之部)』172~176頁	同上

「프레드의 강장이」『아이들보이』 第5號, 1914.1. 2~18 頁	「(上) 浮かれ胡弓」前掲『世界お伽噺』 第37篇, 1902. 1~44 頁	巖谷小波編
「우슴거리 년턱이 편개」同上, 21 頁	「少年笑話 太郎の辨解」前掲『少年』 第120號, 1913.9. 11 頁	少年記者
「우슴거리 오린 내야」同上, 21 頁	「少年笑話 五圓入用」同上, 11 頁	同上
「환장이 벤자민 웨스트 이야기」 『아이들보이』第6號, 1914.2. 13~20 頁	「第八課 BENJAMIN WEST」 『ナショナルリーダー第五譯讀解義』上卷, 麟原文成堂, 1908. 92~132 頁	元木貞雄
「아이들신문 이야기 범과 참새 (1)」 同上, 31 頁	「小學新聞 第二號 虎と雀 (上)」 『小學生』 第4卷第2號, 同文館, 1914.2. 31 頁	
「깃갈이 아씨」『아이들보이』第7號, 1914.3. 1~12 頁	「(下) 喋べり姫」前掲『世界お伽噺』第37編, 1902. 45~68 頁	巖谷小波編
「니를 빼어 어버이를 다수케 하려던 호녀」同上, 19~21 頁	「六 新約克의孝女 (米國)」 『外國少女鑑』 少女文庫第4編, 博文館, 1902. 64~69 頁	下田歌子
「엑테 공기와 엑테산소」同上, 28~30 頁	「液體空氣と液體酸素」前掲『小學生』第4卷 第2號, 1914.2. 2~3 頁	長岡半太郎
「우슴거리 푸성귀와 고기」同上, 31 頁	「少年笑話 菜食と肉食」前掲『少年』 第116號, 1913.5. 16 頁	少年記者
「아이들신문 이야기 범과 참새 (2)」 同上, 33 頁	「小學新聞 第三號 虎と雀 (下)」 前掲『小學生』第4卷第3號, 1914.3. 29 頁	
「거짓 아드님 참 아드님」『아이들보이』 第8號, 1914.4. 1~21 頁	「(上) 二人王子」前掲『世界お伽噺』第8編, 1899. 1~56 頁	巖谷小波編
「양이머 소를 먹이면서 거룩한 사람된 이야기」同上, 24~28 頁	「羊や牛の番をしながら偉い人になつた話」 『幼年世界』第4卷第3號, 博文館, 1914.3. 38~42 頁	乙竹岩造
「닐곱 동생」『아이들보이』第9號, 1914.5. 1~15 頁	「(下) 七人兄弟」前掲『世界お伽噺』第8編, 57~88 頁	巖谷小波編
「시골 계집애로 나라에 어진 어머니된 혹불이 색시」同上, 19~22 頁	「三十三 宿瘤女 (支那)」前掲『外國少女鑑』 210~218 頁	下田歌子
「아이들신문 이야기 가막이와 물 향아리」同上, 29 頁	「上篇 第六十二 鴉と水瓶」 前掲『新譯伊蘇普物語』151~152 頁	上田萬年解說
「아이들신문 이야기 과부와 암담」同上, 29 頁	「上篇 第六十五 寡婦と牝鴉」同上, 158~160 頁	同上
「수탉의 알」『아이들보이』第10號, 1914.6. 1~10 頁	「(下) 牡鷄の卵」前掲『世界お伽噺』第38編, 1902. 40~63 頁	巖谷小波編
「네 절기 이야기」同上, 34~42 頁	「四、四季物語」『赤靴物語』通俗文庫第4編, 内外出版協會, 1908. 48~63 頁	百島操譯編
「병 부자」『아이들보이』第11號, 1914.7. 1~15 頁	「(上) 德利長者」前掲『世界お伽噺』第40編, 1902. 1~38 頁	巖谷小波編
「락타와 돛」同上, 29~30 頁	「東洋イソップ 駱駝と豚」前掲『小學生』 第4卷第3號, 1914.3. 2~3 頁	渡邊北海
「풍궁이」『아이들보이』第12號, 1914.8. 1~11 頁	「(下) 獨木船」前掲『世界お伽噺』第3編, 1899. 41~68 頁	巖谷小波編
「어진 환장이」同上, 22~23 頁	「(七五) 慈善書師」前掲『學校家庭 敎訓お伽 噺 (東洋之部)』378~381 頁	同上
「집승의 목숨」『아이들보이』第13號, 1914.10. 2~6 頁	「動物の壽命」『家庭童話 母のみやげ』同文館, 1905. 43~48 頁	東基吉編
「귀의 시집감」同上, 6~9 頁	「鼠の嫁入り」同上, 49~55 頁	同上
「여호의 신세 감춤」同上, 10~19 頁	「狐の恩返し」同上, 109~123 頁	同上
「까막이 이야기」同上, 19~27 頁	「鳥のお話し」同上, 124~135 頁	同上
「두더귀의 생긴 까막」同上, 27~30 頁	「鼯鼠の起源」同上, 182~186 頁	同上
「皇帝의 새옷」『세별』第15號, 1914.12. 20~22 頁	「七 皇帝の新しい衣服の話」『家庭物語』 婦人之友社, 1913. 44~51 頁	松本雲舟編
「西國名話集 一、가장 貴한 行爲」『세별』 第16號, 1915.1. 5~6 頁	「四 最も貴き行爲の話」同上, 25~29 頁	同上
「西國名話集 二、성냥팔이 處女」同上, 6~9 頁	「廿三 マッチ賣の少女の話」同上, 145~151 頁	同上
「西國名話集 三、매가 님검 살닌 이야기」 同上, 9~11 頁	「廿二 王様を救へる鷹の話」同上, 139~144 頁	同上
「西國名話集 四、와싱톤이 어린이를 살니다」同上, 11~16 頁	「五 ワシントン子供を救へる話」同上, 30~39 頁	同上
「西國名話集 五、텔이 自己아들 머리 우에 노린 林檎을 쪼다」同上, 16~18 頁	「一 テルわが子の頭の林檎を射りし話」同上, 1~7 頁	同上
「西國名話集 六、征服者 윌리암의 세 아들」同上, 18~20 頁	「十八 征服者ウイリアムの三王子の話」同上, 104~109 頁	同上

してグリム童話に着目し、そのなかでも「最も興味多く且有益なる種類を選抜」しているのだが、『赤いチョゴリ』ではここから「姫の行方」、「四人兄弟」の二篇を完譯して掲載している。

また『赤いチョゴリ』には計二〇話のイソップ寓話が収録されているが、これらはすべて『新譯伊蘇普物語』（鍾美堂書店、一九〇七年）からの翻譯である。イソップ寓話を「世才と分別とを、最も明確に指示して痛快なるもの」と評價し、個々の寓話と合わせて教訓が提示されている點が特徴的だが、後述するように『少年』においても同書より數篇が翻譯掲載されており、イソップ寓話を取り扱うにあたって新文館が續けて底本として用いたものであったことがわかる。

次に『アイドゥルボーイ』の底本分析にうつる。『アイドゥルボーイ』は冒頭が世界の童話で構成されており、とくに西洋のものが多い點が特徴的だが、これは巖谷小波の『世界お伽噺』（博文館、一八九九〜一九〇八年）からの抜粹である。全一〇〇冊におよぶ『世界お伽噺』には、「讀者の精神を、之に依つて引立たせ、少年諸君の氣性をば、之に依つて鼓舞しやうと思ふ」との小波の意志により、世界中の民話が収集・編集されている。『アイドゥルボーイ』は、小波の作品を通して朝鮮の兒童に西洋の童話をはじめで紹介したものであるといえよう。⁽⁶⁵⁾

また、同誌におけるアンデルセン童話の底本は『赤靴物語』（内外出版協會、一九〇八年）である。同書は、編者の百島冷泉（一八八〇〜一九六五）が「アンデルゼンの傑れたる御伽噺數篇」を集めたものだが、「その中に含まる、深い教訓を汲みとられむことは自分の切なる願ひである」と讀者に説いているように、⁽⁶⁶⁾教訓を提示することが重視されていた。

さらに『アイドゥルボーイ』には東洋の童話もみられるのだが、たとえば數篇収録されているインドの童話は、すべて『學校家庭 教訓お伽噺（東洋之部）』（博文館、一九二二年）から選んで翻譯されたものである。同書には「教訓の意」を含んだ「日本、支那、印度」のお伽噺等が計一〇〇篇収録されており、とくに「印度の部」においては「餘程教訓が深くなつて居る」という。⁽⁶⁷⁾ そのほか支那の話もみられるのだが、これも同じく博文館刊行の『外國少女鑑』（一九〇二年）という書籍によるものである。

以上より、新文館の児童雑誌における世界各国の童話の紹介は、日本の刊行物を介してなされたものであったと結論づけることができる。當時の日本では童話關聯の書籍等は多數出版されていたが、そのなかでもとくに「有益」さを重視したものの、道徳的な「教訓」の要素を含んだものが底本として選ばれていたといえよう。こうした底本の選擇傾向は、屈強な精神の修養を重視する崔南善の児童觀と結びついていたのである。

このような崔南善の児童觀は、翻譯の過程でも確認することができる。具體例を挙げると、先述した『新譯伊蘇普物語』収録の「狐と兎」という話は、「現狀に満足せよ」との教えで締めくくられている。一方で『赤いチョゴリ』における同話の翻譯をみると、「よりよいものを探す精神がなければいつまでも汚い場所から抜け出せない」、「現狀に満足せず（中略）よりよいものを得られるように努めるべき」といった文が數行にわたって書き足されており、原文の教えに矛盾する結果となっている。

これは、屈強な精神修養の觀點から、児童を教育するためにあえて加筆したものと考えられるが、植民地下の現狀に満足するなどの意味が込められているとも読み取れる。そのほかにも、翻譯の仕方には、他國の諺を削除または朝鮮の諺に置き換え、また人物名等を朝鮮風に言い換えるなど、児童に讀ませるためのさまざまな工夫の跡がみられる。このように、日本のものを再構成して朝鮮の讀者に提供していたといえるだろう。

(三) 「子どもらしさ」を表す構成物

次に、「子どもらしさ」を表すものに焦點を當てて、ひとつずつ取り上げて詳しくみていきたい。

まず言及したいのが、『赤いチョゴリ』と『アイドウルボーイ』のほぼ全號に掲載されている「다음 엮지（次はどうなるの）」という漫畫である。「これは順々に見ていく面白い繪なので、まず繪を詳しく見て意味を推測し、次を見ると説明がなくても面白」⁽⁷⁰⁾いとの説明書きがあるように、現在の四コマ漫畫に似た形式のもので、朝鮮雜誌類における聯載漫畫の始

まりとされる。⁽⁷¹⁾ 一方で、当時の日本の児童雑誌にはポンチ繪という滑稽な繪がよくみられたが、実際に兩者を比較対照すると、「다음 엮지」の大半はそれらを轉載または参照したものであったということがわかる。

【表2 「다음 엮지」の轉載元】に示しているように、筆者が確認したところ、大部分は博文館の『幼年畫報』⁽⁷²⁾（一九〇六年一月～一九三五年二月）または實業之日本社の『幼年の友』⁽⁷³⁾（一九〇九年一月～終刊不明）からの轉載である。たとえば【圖1】の事例では、一九一四年二月に『幼年畫報』に掲載されたものが早くも翌月の『アイドルボーイ』にみられるように、日本の最新のものが反映されることもあった。

また、新文館の児童雑誌には「다음 엮지」のみならずさまざまな挿繪が掲載されている。そのなかでも、たとえば『赤いチョゴリ』第一年第二號（一九二三年一月）の「그림자 그림（影繪の繪）」は巖谷小波の『新撰日本少年寶鑑』（文王閣、一九二一年）における「影繪」を、第一年第四號（一九二三年二月）の「갈광 질광（うろろう）」は『少年世界』第一四卷第二號（一九〇八年二月）の「迷路 面白い考物」を轉載したものであると思われる。また『新譯伊蘇普物語』や『世界お伽噺』の挿繪もそのまま使用されるなど、日本のものが多数用いられている。

挿繪に續いて、次は笑話を取り上げたい。「다음 엮지」と同じく『赤いチョゴリ』と『アイドルボーイ』兩誌のほぼ全號にみられるのが、「우습거리（笑いの種）」という笑話のコーナーである。どれも短い話であり、登場人物も幼い年齢に設定されている。

ポンチ繪と並んで笑話も當時の日本の児童雑誌ではよくみられたものであったが、この點を考慮しつつ詳しくみると、『赤いチョゴリ』は『日本少年』⁽⁷⁴⁾（實業之日本社、一九〇六年一月～一九三八年一〇月）における、讀者投稿による笑話の紹介欄「話の種」より、『アイドルボーイ』は日本の『少年』⁽⁷⁵⁾（時事新報社、一九〇三年一〇月～終刊不明）の「少年笑話」より、それぞれ數篇選んで翻譯したものであったということが確認できる。⁽⁷⁶⁾⁽⁷⁷⁾

最後に、『アイドルボーイ』における「아이 들 신문」に着目したい。これは、誌面上において新聞形式で世界の文化を

【表 2 「다음엇지」의轉載元】

작품名	底 本
「다음엇지 담배 먹는 소」『붉은 저고리』 第 1 年第 6 號, 1913.3, 5 頁	「牛の煙草」『幼年畫報』第 8 卷第 3 號, 博文館, 1913.2, 8 頁
「다음엇지 닭 못살게 군 갑흙」 『붉은 저고리』第 1 年第 7 號, 1913.4, 4 頁	「鷄の卵」『幼年畫報』第 8 卷第 4 號, 1913.3, 8 頁
「다음엇지 토끼 산양의 딱딱한 맛」 『붉은 저고리』第 1 年第 8 號, 1913.4, 4 頁	「兎の穴」『幼年畫報』第 8 卷第 5 號, 1913.4, 8 頁
「다음엇지 건져내니 에비」『붉은 저고리』 第 1 年第 11 號, 1913.6, 6 頁	「ポンチ」『幼年畫報』第 8 卷第 7 號, 1913.5, 8 頁
「다음엇지 뜻밖갓 산양」『아이들보이』 第 1 號, 1913.9, 22 頁	『幼年の友』第 5 卷第 8 號, 實業之日本社, 1913.8, 9 頁
「다음엇지 개가 속았나 사람이 속았나」 『아이들보이』第 2 號, 1913.10, 34~35 頁	「犬のとりあひ」『幼年世界』 第 3 卷第 6 號, 博文館, 1913.6, 12~13 頁
「다음엇지 뜻밖갓 그물」『아이들보이』 第 3 號, 1913.11, 11 頁	『幼年の友』第 5 卷第 9 號, 1913.9, 28 頁
「다음엇지 요리로 살작」『아이들보이』 第 4 號, 1913.12, 25 頁	『幼年の友』第 5 卷第 11 號, 1913.11, 11 頁
「다음엇지 마춤 고맙다」『아이들보이』 第 5 號, 1914.1, 29 頁	「ヨクトブマリ」『幼年の友』 第 5 卷第 11 號, 1913.11, 32 頁
「다음엇지 차고 깨서 에그머니」 『아이들보이』第 6 號, 1914.2, 25 頁	「ステツキ」『幼年畫報』 第 8 卷第 14 號, 1913.11, 8 頁
「다음엇지 그림이 살아」『아이들보이』 第 7 號, 1914.3, 13 頁	『幼年畫報』第 9 卷第 3 號, 1914.2, 8 頁
「다음엇지 사람 닭」『아이들보이』 第 8 號, 1914.4, 33 頁	『幼年畫報』第 9 卷第 3 號, 1914.2, 8 頁
「다음엇지 쥐 피에 빠진 괴」 『아이들보이』第 9 號, 1914.5, 30 頁	『幼年の友』第 6 卷第 1 號, 1914.1, 20 頁
「다음엇지」『아이들보이』 第 10 號, 1914.6, 24 頁	「口畫 폰치」『幼年畫報』 第 8 卷第 15 號, 1913.11, 8 頁
「다음엇지」『아이들보이』 第 11 號, 1914.7, 20 頁	『幼年畫報』第 9 卷第 4 號, 1914.3, 8 頁
「다음엇지」『아이들보이』 第 12 號, 1914.8, 26 頁	『幼年畫報』第 9 卷第 10 號, 1914.8, 8 頁
「다음엇지」『아이들보이』 第 13 號, 1914.10, 31 頁	『幼年の友』第 6 卷第 3 號, 1914.3, 20 頁



『幼年畫報』第9卷第3號 (1914年2月)



『아이들보이』第7號 (1914年3月)

【圖1】

はじめとするさまざまな情報を掲載する取り組みだが、雑誌における新聞企劃もまた、『幼年號』や『日曜世界』など日本の児童雑誌でよく實施されていたものである。そのなかでも、「아이들신문」は『小學生』⁽⁷⁸⁾(同文館、一九一一年三月〜終刊不明)における「小學新聞」を参照したものと思われる。「아이들신문」には「小學新聞」掲載の記事が翻譯して載せられており、また「小學新聞」掲載號の他の記事も『아이들보이』⁽⁷⁹⁾にみられるのである。⁽⁸⁰⁾

このように、児童雑誌における「子どもらしさ」を表す構成物は、その大部分が日本の児童雑誌等から抜粋されたものであったと指摘できる。崔南善は、巖谷小波や博文館の刊行物を中心に、かつて批判していた「輕軟なもの」も取り入れるようになったということがわかる。⁽⁸¹⁾新文館の児童雑誌は、以上みてきたように多數の日本の刊行物を参照・翻譯して内容を構成し、また児童に接近する工夫の面でも参照していたのである。

しかし、そもそも日本の刊行物の翻譯という行爲は「少年」や「總合教養」雑誌『青春』でもみられるものであり、児童雑誌に特有の現象ではない。ここでさらに言及すべきは、

『赤いチョゴリ』や『アイドゥルボーイ』は翻譯物だけでなく、朝鮮の昔話や人物の紹介、ハンゲル表記といったいわゆる「朝鮮的なもの」の掲載も多くの比重を占めているという点である。

次章では、新文館の児童雑誌の特徴的な点といえる「朝鮮的なもの」に焦点を当て、さらに内容の分析を深める。

三 児童雑誌にみる「朝鮮的なもの」

(一) 朝鮮の昔話や人物等の紹介

新文館の児童雑誌には「朝鮮的なもの」がどのように描かれているのであろうか。まず、特徴的な点として挙げられるのが朝鮮の歴史上の人物に關する言及である。『赤いチョゴリ』および『アイドゥルボーイ』に掲載された記事には、高麗時代から朝鮮時代にいたるまでの幅廣い年代における複数の朝鮮の人物が登場する。たとえば、世界の偉人紹介欄では高麗末期の文臣である鄭夢周や朝鮮初期の文臣、金時習といった朝鮮の歴史上の人物が取り上げられている。⁽⁸²⁾

また、朝鮮の昔話や古代小説を再構成したものも多數収録されている。たとえば『赤いチョゴリ』には「마보온달이(馬鹿の溫達)」や「세가지 시험(三つの課題)」といった朝鮮の物語が複数掲載され、また『アイドゥルボーイ』でも「흥부(フンプ・ノルプ)」や「심청(沈淸)」といった朝鮮の傳承物語が再編成されている。

とくに『アイドゥルボーイ』は朝鮮で最初に昔話収集運動を起こした児童雑誌といわれ、朝鮮傳承の昔話を重視していた。⁽⁸³⁾ 崔南善は、朝鮮には昔の人々が残した「さまざまな良い話」があるにもかかわらず、「未だすべての話をひとつに集めて學問的に研究したものがなく、非常にもどかしい」として、⁽⁸⁴⁾ 讀者に「廣く朝鮮のなかで傳えられてきた話」を募集しているのだが、「話は必ず朝鮮に昔から傳わるものでなければならず、他國の本や言葉によるものを翻譯したり書き寫した場合は採用しません」と明記するなど、「朝鮮」の話であることを強調している。⁽⁸⁵⁾

このような『アイドゥルボーイ』の昔話収集運動ひいては「朝鮮的なもの」を重視する背景には、日本の児童文學界の存在があった可能性がある。同時期における巖谷小波の活動に目を向けると、小波は一八九四年から一九一五年にかけて全二〇〇冊以上の物語を刊行しており、そのなかでもとくに『日本昔噺』（博文館、一八九四～一八九六年）や『日本お伽噺』（博文館、一八九六～一八九八年）などは日本の民話や英雄譚を集成し、大規模な再話編集を施したものであった。崔南善が日本留學もしくは日本滞在中にこれらを目にし、朝鮮の昔話の収集を思いついた可能性も考えられるであろう。

しかし、より重要なのは一九一〇年代における崔南善の「朝鮮的なもの」に對する意識の表れであるといえる。⁽⁸⁶⁾たとえば、崔は一九一〇年に朝鮮光文會を組織する。⁽⁸⁷⁾同團體は「時勢が急轉化」して「韓日併合が實現」し、「朝鮮土の眞面目と朝鮮人の眞才智が永遠に隠蔽し埋没」しようとするなかで、「國は保存できないとしても文化は明らかにしなければならぬ」との崔の意志により設立されたものであった。「朝鮮舊來の文獻、圖書のなかで重大で緊要なものを収集、編纂、開刊し貴重な文書を保存傳布」することを目的に掲げ、五年間で『擇里志』等古典を中心に五九冊を刊行している。⁽⁸⁸⁾

關聯して古典に關していえば、一九一〇年代に新文館より刊行された、定價六錢の叢書である「六錢小説」も、廣告に「古書のなかで面白いものを校正して出すもの」とあるように、⁽⁸⁹⁾全八種一〇冊のうち實に七種九冊は「洪吉童傳」や「興夫傳」といった活字本古典小説であった。⁽⁹⁰⁾刊行の辭には、古典の名前や内容を變え「珠玉を瓦礫に變えて法外な利を貪る」事例が多く、そのような「弊害を改める知謀」とあるが、⁽⁹¹⁾朝鮮に古くから傳わるものを重視し、古典そのままの姿を残そうとする姿勢がうかがえる。

つまり、朝鮮光文會の設立や「六錢小説」といった試みは、併合による朝鮮の傳統の喪失を憂慮し、失われつつある「朝鮮的なもの」の保存を目的としたものであったとみることができるといえる。こうした一九一〇年代にみられる崔南善の朝鮮の傳統に對する意識が、児童雜誌にみられる「朝鮮的なもの」を重視する姿勢につながっているといえよう。

また、児童雜誌には單に「朝鮮的なもの」が羅列されているのではなく、「朝鮮」に對する自負心を與えるための工夫

が施されている。

この点についてみていく前に、まず崔南善が朝鮮の文物に關して述べた箇所について言及したい。崔は、『アイドゥルボーイ』第一〇號の「동경에서 (東京より)」において、東京で「博覽會」や「工科大學展覽會」へ赴いたと述べている。⁹²そして、展示品の「活字」に關する「世界で朝鮮が最初」であるとの説明や、「高句麗の輝かしい藝術品」に關する「東洋で最も古い繪であり、世界に誇れる」ものであるとの説明などを聞き、非常に誇らしかったと記している。この記述より、崔南善自身が「朝鮮的なもの」に對して自負心を持っており、また讀者である兒童にも「朝鮮」に自負心を持つことを促す姿勢を有していたことがわかる。

では、實際に兒童雜誌においてはどのような工夫が施されていたのであろうか。とくに構成や配置の面に目を向けると、たとえば『赤いチョゴリ』の創刊號ではグリム童話の「姫の行方」と「마보은달이」という朝鮮の物語が並べて掲載されている。同じく、『アイドゥルボーイ』でも創刊號に「綱引の力」というアフリカの童話と「범의 뒤다리 북들고六十리 (虎の後ろ足をつかんで六十里)」という朝鮮の昔話が合わせて載せられるなど、世界の物語と朝鮮の物語を並列させて収録した事例は複数みられる。そのほか、『赤いチョゴリ』における偉人紹介欄においても、ニュートンやナポレオン、リンカーンといった各國の偉人と並列させるかたちで、先述した鄭夢周と金時習が組み込まれているのである。

さらに兩誌の記事においても、たとえば努力の大切さについて論じるなかで朝鮮中期の韓濩と唐の李白の事例を取り上げ、⁹³實踐することの重要性を説くなかで朝鮮中期の鄭平九とニュートン、ナポレオンおよびシエイクスピアを例に挙げる⁹⁴など、各國の偉人と合わせて高麗時代や朝鮮時代の人物が取り上げられている。

このように、朝鮮の物語や人物を世界各國の物語や偉人と並列させるといった具合に配列を工夫することで、朝鮮にも世界に比肩する物語や人物が存在することを示し、民族の自負心の涵養が圖られていた。新文館の兒童雜誌には、併合による朝鮮の傳統や文化の喪失を憂慮して「朝鮮的なもの」の保存を試み、「朝鮮」に自負心を持たせようとする崔南善の

姿勢が表れているということができよう。⁽⁹⁵⁾

(二) ハングル表記と固有語の創造

次に、『赤いチョゴリ』および『アイドゥルボーイ』のハングル表記の問題に焦点を当てたい。

『アイドゥルボーイ』のみならず『赤いチョゴリ』も大部分がハングルで表記されているという点が特徴的だが、これには文字と言語の保存ならびに発展の試みがひそんでいると思われる。しかしそれだけではなく、その背景には文字と言語の保存ならびに発展の試みがひそんでいると思われる。

まず文字の保存・発展の観点からみていく。先述のように『アイドゥルボーイ』ではハングルのローマ字のように分解して書く「한글폴이」が試みられているのだが、その趣旨説明文のなかには「我々の文字は文字のなかで最も優れたもので「他の面は完璧」だが、書き方に直すべき点があり、改善して広く傳播すべきとの主張がみられる。⁽⁹⁶⁾「한글폴이」は『アイドゥルボーイ』第六號以降、第一二號を除きすべての號で広く實施されており、この取り組みは、民族の「優れた」文字であるハングル文字に對する自負心を與え、さらに發展させるための試みであつたとみることもできるのではないだろうか。

次に、言語という観点から固有語の創造の問題を取り上げたい。朝鮮語は漢字語と、漢字に依存しない固有語で成り立っている。『アイドゥルボーイ』では、表紙を「책 거 속 (本の表面)」、挿繪を「그림본 (繪の見本)」、木版を「나무새김 (木に刻んだもの)」、作品懸賞を「글쓰기 (文を選ぶこと)」などというように、漢字語が固有語で表現されており、先行研究ではこの點が注目されてきた。⁽⁹⁷⁾

ここでは、さらに『赤いチョゴリ』および『アイドゥルボーイ』における日本の底本の翻譯のされ方に注目したい。底本と照らし合わせて詳しくみると、「飛行機」を「나르니틀 (飛ぶ機械)」、「自動車」を「질로가니수레 (ひとりで動く車)」、

「鯉節」を「물치(松魚) 말년짓(宗太鯉(松魚)を乾かしたもの)」、「御馳走」を「조흔 먹이(良い食べ物)」、「智者」を「슬기 있는이(知恵のある人)」など、原文を最大限、漢字語を使わずに固有語で言い表しているということがわかる。

こういった傾向は、児童雑誌に特有のものである。たとえば『少年』と『赤いチョゴリ』では『新譯伊蘇普物語』の同じ箇所を翻譯している部分があるが、『少年』では底本に忠實に漢字語のまま翻譯しているのに對し、『赤いチョゴリ』では「毎日」を「날마다(日ごと)」、「信用」を「믿음성(信用性)」等、わざわざ固有語で言い換えているのである。

一方、崔南善は『アイドゥルボー』の讀者投稿に關して「ぜひとも朝鮮語で書き、すでに朝鮮語になっている漢文語はいくら混ぜても構いません」と呼びかけている。⁽¹⁰⁾ 實際の讀者投稿文はほとんどが漢字語混じりのものになっているが、崔自身が翻譯の過程で漢字語を固有語に直すことに不便さを感じていたため、讀者にはこのように呼びかけていると解釋することも可能であろう。換言すれば、漢字語を使わずに文章を書くことの不便さを認識しながらも固有語に固執していたということである。つまり、児童雑誌にみられる固有語の創造は、漢字に依存しない純粹な朝鮮語を保存しようとする試みの一環として捉えうるのである。

以上のように、ハングル表記や固有語の創造は單に読みやすさのためだけでなく、文字と言語を保存、發展させようとする意志によるものでもあったということができよう。「한글놀이」および固有語の創造は、そのための實驗的な試みとして位置づけられるのではないだろうか。

このように、新文館の児童雑誌は單に翻譯物を掲載するだけでなく「朝鮮的なもの」の掲載を通して民族の自負心を涵養し、その保存と發展を企圖していたといえる。

四 児童雑誌から「總合教養」雑誌『青春』へ

(一) 『アイドルボーイ』第一三號について

ここまで『赤いチョゴリ』および『アイドルボーイ』に關して分析してきた。ここで、その要點を整理しておこう。

まず、新文館がこれらの児童雑誌に着手した背景には當時の朝鮮の状況があつた。すなわち、併合後の一九一〇年代における武斷政治下の檢閲を免れるため、また出版不況のなかでの新たな需要を見越して、児童に目を向けるようになったと考えられる。

崔南善が児童雑誌を通して目指したのは屈強な精神の修養であり、それを日本の刊行物を活用しながら實現させようとしていた。さらに、『赤いチョゴリ』や『アイドルボーイ』には翻譯物のみならずいわゆる「朝鮮的なもの」も複数掲載されているが、併合による喪失が懸念される朝鮮の傳統や文化を保存し、また讀者に「朝鮮」に自負心を持たせるためのさまざまな工夫が施されているといえる。

このように、新文館の児童雑誌は朝鮮の内的な條件と日本の影響という外的な條件が折り重なって誕生したものであつたと結論づけることができる。

しかし、『アイドルボーイ』は第一三號（一九一四年一〇月）を最後に以後の刊行が確認できなくなる。いつまで続いたのかは不明だが、本章では『アイドルボーイ』がどのようにして衰退していったのか、同時期の他の雑誌との關係性を含めて考察してみたい。

まず、『アイドルボーイ』第一三號はほぼ童話と讀者投稿のみで構成され、第二二號までとは明らかに異なる内容となつている。さらに詳しく分析すると、掲載されている童話はすべて『家庭童話 母のみやげ』（同文館、一九〇五年）とい



『家庭童話 母のみやげ』(1905年)



『아이들보이』第13號(1914年10月)

【圖2】

う一冊の書籍からの抜粋であることがわかる。同書は、二三篇の童話と一〇篇の「いそっぷの話」で構成された童話集であり、序文はないが巻頭には「可愛きお子様達へのみやげ話の料にもとこの書物をおつ母さま方へ贈呈いたします著者」とある。

また、第一三號は第一二號までとは表紙も異なるが、【圖2】からわかるように、この『家庭童話 母のみやげ』の巻頭の挿繪が表紙としてそのまま使用されている。さらに、たとえば【圖3】のように、第一三號における童話の挿繪やレイアウトも同書と同一である。

このように、第一三號はほぼ一冊の日本書籍をもとに構成されているといえ、複数の底本を組み合わせるなどして構成された第一二號までと比べると、簡素なつくりになっている。

また、第一三號の巻頭では『アイドゥルボーイ』の創刊から一年を振り返り「皆さんの願うところを萬分の一も満足にして差し上げられなかつたので(中略) 今後は誠意を盡くすことを約束します」とこれまでを回顧しての所感が述べられている。さらに、近々新文館から『青春』という新し



『家庭童話 母のみやげ』(1905年)



『아이들보이』第13號 (1914年10月)

〔圖3〕

い雑誌が出る豫定」であるとして、『青春』に關し「誠意を盡くして出すもの」であつて、「必ず世間の耳と目を開く」ものになるであらうと廣告している。⁽¹⁶⁾

こういった記述から、新文館は『アイドゥルボーイ』第一三號を機に兒童雜誌に一區切りつけようとしてゐることが読み取れる。その背景にあると思われる『青春』とは「少年から老年にいたるまでの各界各層の誰もが興味深く讀めるよう編輯」され、人文科學、社會科學、自然科學と多岐にわたる論説が掲載されたいわゆる「總合教養」雜誌であり、とくに「中學生」を對象として一九一四年一〇月に創刊された。⁽¹⁶⁾

つまり、新文館はこの時點で兒童向けから「中學生」向けへと年齢層を上げたものに方向轉換しつゝあつたといえる。そのため、『アイドゥルボーイ』第一三號が簡略化し以後の刊行が確認できないのではないだろうか。次節では、こうした對象年齢の引き上げに關して、『アイドゥルボーイ』と同時期の雑誌である『セビヨル』をもとに分析を加えたい。

(一) 『セビヨル』について

『セビヨル』(一九二三年九月?～一九二五年一月、通卷一六號)は、『アイドゥルボーイ』と同時に新文館より刊行された雑誌である。李光洙(一八九二～一九五〇?)が編集を擔當したとされる同誌は、内容面では文藝欄が重視され、また『赤いチヨゴリ』や『アイドゥルボーイ』とは異なりハンングルと漢字の混用表記となっている。

第一五號(一九一四年二月)および第一六號(一九一五年一月)しか現存しておらず未だ多くの點が謎に包まれているが、『青春』第三號(一九一四年二月)にみられる『セビヨル』の廣告に「本誌に聯載の『읽어리(讀み物)』は、すでに京城各私立高等程度學校の必須參考書に採用され」とあることから、朝鮮初の中等學校(高等普通學校、女子高等普通學校、實業學校)生向け雑誌とみなされてきた。

同時に創刊された『アイドゥルボーイ』と比べてみても、『セビヨル』ではより高度な科學知識が扱われており、また「다음엇지」や笑話こそみられるものの『アイドゥルボーイ』に含まれる數字遊びや迷路といった要素は確認できない。

さらに、兩誌では底本の選擇傾向にも違いがみられる。たとえば、『セビヨル』第一六號には「西國名話集」という名で西洋の名作が六篇収録されているが、この底本は『家庭物語』(婦人之友社、一九二三年)という書籍である。

同書は、明治から昭和期にかけての編集者、翻譯家であった松本雲舟(一八八二～一九四八)の、「大正年代の小さい男が立派な品性を養ひ、健かに賢く、他日世界のため、國家のために、有益な働きをなすやうに生ひ立つことは、私の真心よりの祈であります」との意志のもとに刊行されたものである。著者が、中學時代に教わった「英語讀本」のなかから選別したものが編集されているが、「普通のお伽噺」とは違って「とりとめもない空想的なところなどはなく、面白い裡にも健全な教訓が含まれて」という⁽ⁱⁱⁱ⁾。世間で流行していた「お伽噺」を批判し、教訓を學ぶことや品性を高めることを重視している點が特徴的である。

このように、中等學校生を對象とする『セビヨル』では、普通學校生を對象とする『アイドゥルボーイ』に比べ、より教訓の要素が強いものが底本として選擇されていたといえよう。以上より、内容の構成や底本の選擇に兩誌の對象年齢の違いが表れていると指摘できる。

ただ、ここまでの『セビヨル』に関する分析は、現存する第一五號および第一六號を用いたものに過ぎない。ここできらに言及すべきは、『セビヨル』はもともと児童を對象としていた可能性があるという点である。

先述の『セビヨル』に關する廣告を詳しくみると、冒頭に「本誌は舊『赤いチョゴリ』以來の少年文學の先驅となり世間の歡迎を長く受けてきた」とある。また、何より崔南善自身が「少年」から『青春』が出るまでに児童雑誌としては『セビヨル』『赤いチョゴリ』などがあり」と後に回想し、『セビヨル』と『アイドゥルボーイ』を共に「児童雑誌」としてみなしているのである。

こういった點を考慮すると、新文館は『赤いチョゴリ』の停刊處分を受け、檢閲によつて雑誌の刊行が滞つた時に備え、『アイドゥルボーイ』と『セビヨル』の二誌を同時に刊行した可能性がひとつの假説として考えられよう。

また、何度か言及した『青春』第三號掲載の『セビヨル』の廣告には、「十一月より内容外形に一大革新を加え、程度を稍高し進學益智上の無類の良師友となるようにした」とある。ここから、『セビヨル』は一九一四年一月から内容の「程度を稍高し」、すなわち對象年齢を引き上げていたことが讀み取れる。

さらに、「一大革新を加え」た後の『セビヨル』第一五號における『青春』の廣告のなかに「本誌の兄弟『青春』との表現がみられることに鑑みれば、新文館は『セビヨル』の位置づけを「赤いチョゴリ」以來の少年文學の先驅」から『青春』の「兄弟」に變化させていたといえる。要するに、『セビヨル』はもともと児童を對象としていたが、一九一四年一月より想定讀者の年齢を上げたと考えられるのである。同年一〇月に創刊された『青春』や『セビヨル』の事例からわかるように、新文館は雑誌事業において對象年齢を底上げするようになっていった。

このように、児童雑誌『アイドルボーイ』が一九一四年一〇月発行の第一三號で簡素なつくりになるのとほぼ同時に、新文館は主に「中學生」を對象とした『青春』に注力するようになり、また『アイドルボーイ』と同時期に刊行されていた『セビヨル』も對象年齢が引き上げられるようになる。つまり、児童雑誌がいつ終焉を迎えたのかは定かでないが、對象年齢を引き上げるなかで自ら終刊にした可能性が高いと思われるのである。⁽¹⁶⁾

このようにみるならば、児童雑誌は新文館における刊行雑誌の對象年齢の引き上げにともない、その役割を終えたといえる。

おわりに

本稿では、新文館が一九一〇年代に相次いで出版した児童雑誌に焦点を当て、その成立過程を當時の朝鮮の状況や同時期の日本の児童文學界との影響関係のなかで分析し、不明点が多いこれらの刊行物の實態に迫った。

當時の朝鮮において児童を對象とした讀み物というものは目新しかったが、新文館が児童雑誌を企劃した背景には、武斷政治下における検閲と出版不況という朝鮮の置かれた状況があった。さらに外的な要因に目を向けると、當時の日本では複数の児童雑誌が刊行されており、児童教育の補助としての刊行物の發行という發想は日本の影響であった可能性があるなど、新文館の児童雑誌は、當時の朝鮮の状況という内的條件に日本の児童文學界という外的條件が組み合わさった産物であったといえる。

實際に内容を分析すると、多數の日本の刊行物を参照して構成されていることがわかるが、「子どもらしさ」を表す構成物のみならず「有益」で教訓的なものが底本として選擇されるなど、屈強な「少年」の養成を目指した崔南善の『少年』における試みが引き継がれているということが指摘できる。また、これらの児童雑誌は翻譯物と合わせて「朝鮮的なもの」の掲載も多くの比重を占めるが、そこには併合による喪失が懸念される朝鮮の傳統や文化を保存し、「朝鮮」に自

負心を持たせようとする崔の姿勢が表れており、児童雑誌の特徴的な点であるハングル表記および固有語の創造も、その一環としてみることができるといえる。

雑誌事業における対象年齢の引き上げという新文館の方針轉換にともない、児童雑誌は『アイドゥルボーイ』第一三號を最後にその役割を終えたと考えられる。

しかし、一方で『赤いチョゴリ』や『アイドゥルボーイ』の試みが『青春』に引き継がれている面もあることを最後に指摘しておきたい。それが、「朝鮮的なもの」の掲載や「朝鮮」に自負心を與える工夫といった点である。たとえば、『青春』には朝鮮の歴史や文化等を紹介したものが複数掲載されており、また朝鮮の古典と世界古典文學を合わせて収録するといった配列上の工夫がみられる。⁽¹⁶⁾さらに、各國と比較して朝鮮の「古美術」や「活字」等の影響力を説いた「我等⁽¹⁷⁾世界⁽¹⁸⁾の甲富（我等は世界の富豪）」をはじめとして、朝鮮の文化の獨自性や優位性を強調した論説も多数載っている。⁽¹⁹⁾

なにより、武斷政治下において續けて刊行され、『少年』以來の啓蒙の試みを續けたという點に、『赤いチョゴリ』や『アイドゥルボーイ』といった新文館の児童雑誌の意義があるといえよう。

なお、新文館は一九一〇年代において児童向けと思われる複数の翻譯小説を同時に刊行している。本稿では雑誌に焦點を當てたが、これらの單行本の分析ならびに『セビョル』と『青春』の相互關係についての考察等は、今後の課題としたい。

註

(1) 『少年』における「少年」は未來の大韓帝國の擔い手という意味し、幅廣い年齢層を指した。『少年』の内容も、創刊當初は子ども向けの讀み物が含まれていたが、次第に一見

少年には難解に思われるような内容が比重を占めるようになる(拙稿「崔南善の初期の出版活動にみられる日本の影響——一九〇八年創刊『少年』を中心に」『朝鮮學報』二

- 四九・二五〇、二〇一九、六〇〜六三頁。
- (2) たとえば、元鍾讀は一九一〇年の韓國併合にともない新文館の兒童雜誌には「啓蒙の後退」が明確にみえると指摘している(元鍾讀『兒童文學史』創作斗批評社、二〇〇一、一四五頁)。
- (3) 新文館の兒童雜誌についての言及がはじめてみられるのは李在徹の『韓國現代兒童文學史』(二志社、一九七八年)だが、その後研究が活潑化するのは二〇〇〇年代に入ってからである。また、文學研究の觀點で取り扱われることがほとんどで、新文館もしくは崔南善に關する研究の一環として位置づけたものは少ない。
- (4) 前者としては、趙銀淑「一九一〇年代 兒童新聞『붉은 저고리』研究」『韓國近代文學研究』四一二、二〇〇三、朴英琦「一九一〇年代 雜誌『새별』研究」『韓國兒童文學研究』二二二、二〇一二などが挙げられ、後者としては朴淑慶「新文館의 少年用雜誌가 韓國近代兒童文學에 끼친 影響」『兒童青少年文學研究』一、二〇〇七、권혁준「아이 들보이」의 兒童文學史的 意義에 대한 研究」『韓國兒童文學研究』二二、二〇一二などが挙げられる。
- (5) 「朝鮮的なもの」とは、崔南善が探究した歴史や文化、宗教上における朝鮮獨自の特殊なもの、傳統的なものとの總稱である。詳しくは、柳時賢「崔南善研究——帝國의 「近代」와 植民地의 「文化」 歴史批評社、二〇〇九参照。
- (6) 崔南善は『赤いチョゴリ』を「新聞」としているが、本稿では便宜上雜誌として扱う。先行研究においても、たとえば趙容萬は「赤いチョゴリ」を「雜誌」と分類しており(趙容萬『六堂崔南善——그의 生涯・思想・業績』三中堂、一九六四、一一六頁)、また崔南善の聞き取り調査を行った洪一植によると、崔自身が「月刊兒童雜誌」であると證言したという(洪一植『六堂研究』日新社、一九五九、三四〜三五頁)。
- (7) 金興濟は、李光洙が五山學校で教えた學生のなかで最も秀才であったとされる。『少年』廢刊(一九一一年)の翌年、李の紹介で金が上京して新文館で起居することになり、崔南善は眞面目な金に「赤いチョゴリ」を發行させたという(趙容萬、前掲『六堂崔南善』、一一六頁)。
- (8) 趙銀淑、前掲「一九一〇年代 兒童新聞『붉은 저고리』研究」、一一五頁。『赤いチョゴリ』の掲載記事等はほとんどが無署名であり、記者名が確認できるのは毎號聯載の「개우치 들일 말슴」を擔當した「한샘」(崔南善の筆名)のみである。このことに加え、當時の新文館の刊行物を實質的に擔當していたのは崔南善であったことから、本稿でも『赤いチョゴリ』の掲載記事はほぼすべて崔によるものであったとみなす。
- (9) 「인사 엮음」말슴」『붉은 저고리』第一年第一號、一九一三年一月、一頁。『赤いチョゴリ』を着た人たちは兒童を指す表現と考えられるが、誌面上に説明等はない。
- (10) 『아이 들보이』第一二號、一九一四年八月、卷頭廣告。『赤いチョゴリ』は第一二號(一九一三年六月)で停刊處分を受けるが、「餘った幾百部を一冊に合装して廉價で提

- 供」するとして、廣告が掲載されている。
- (11) 趙銀淑、前掲「一九一〇年代兒童新聞『붉은 저고리』研究」、二二八頁。
- (12) 崔南善「한글문단의 초창기를 말함」(『現代文學』第一號、一九五五年一月、三八頁)によると、『少年』と『青春』の發行部数が二千部であったのに對し、『赤いチョゴリ』は三千部を記録したという。
- (13) 『아이들보이』創刊號に「赤いチョゴリ」は六月十五日(第十二號)より發行できなくなり、残念でままりが悪いことこの上ない」とあり(『옛습는 말슴』『아이들보이』第一號、一九一三年九月、四〇頁)、また「第拾貳號に至り官令で停廢」(『아이들보이』第二號、一九一四年八月、卷頭廣告)との記述もみられる。
- (14) 권혁준、前掲「『아이들보이』의 兒童文學史的 意義에 대한 研究」、五五頁。崔南善が一人で企劃、編集したとの指摘もみられる(朴珍英『책의 誕生과 이야기의 運命』소명出版、二〇一三、八二頁)。
- (15) 『아이들보이』第一號、一九一三年九月、一頁。また、『아이들보이』の廣告には「天下の父母は皆援護してください。百萬の子弟は皆愛讀してください」とある(『新文館發賣書籍總目錄』第一號、新文館販賣部、一九一四、四頁)。
- (16) 前掲『新文館發賣書籍總目錄』、四頁。
- (17) 『옛습는 말슴』『아이들보이』第一號、一九一三年九月、四〇頁。
- (18) 정진현、박혜숙「韓國의 그림책 認識과 形成過程」『童話와 翻譯』二六、二〇二三、二九一～二九二頁。
- (19) 崔南善は、朝鮮で最初に童話を書き「子ども」を意味する固有語の「어린이」という言葉をはじめて使った人物であるとの評價もみられる(김창현「少年 혹은 兒童文學의 起源에 대한 一考察——李德懋와 崔南善의『兒童』概念을 중심으로」『語文論集』六六、二〇一六、八九頁)。
- (20) 「兒童」という言葉が朝鮮の新聞や雑誌で廣く使われるようになったのは、一九〇五年頃からである(李漢燮『日本語에서 온 우리말 辭典』高麗大學校出版部、二〇一四、五二七～五二八頁參照)。
- (21) 『아이들보이』第二號、一九一四年八月、卷頭廣告。
- (22) 「이 신문 내는 의사」『붉은 저고리』第一年第四號、一九一三年二月、附録一頁。
- (23) 同右、附録二頁。
- (24) 『少年』第三年第九卷、一九一〇年二月、卷頭。『皇城新聞』一九一〇年八月三日附、三面の廣告欄にも、『少年』第三年第八卷が「押收發賣禁止」ならびに「發行停止」處分を受けたと記されている。なお、新聞紙法第二一條には「新聞紙が安寧秩序を妨害したり風俗を壞亂するものと認められる時」に當局が發賣禁止や押收、發行停止にできるとある(『官報』第三八二九號、一九〇九年七月二七日)。新聞紙法について、詳しくは、金昌祿「日帝強占期言論・出版法制」『韓國文學研究』三〇、二〇〇六參照。
- (25) 金根洙「武斷政治時代の雜誌概観」『韓國雜誌概観』吳

- 號別目次集」永信아카데미韓國學研究所、一九七三、一一一—一一五頁參照。朝鮮警察協會刊行の『警務彙報』をみると、この時期に發行許可を受けた朝鮮人の雑誌は、『東西醫學報』や『朝鮮佛教叢報』など、そのほとんどが純粹な學術や商業もしくは宗教關聯のものであることが確認できる。
- (26) 詳しくは、拙稿、前掲「崔南善の初期の出版活動にみられる日本の影響」參照。
- (27) 「ABC契」『少年』第三年第七卷、一九一〇年七月、三二頁。
- (28) 崔南善は、申采浩の「讀史新論」を「國史私論」との題目で掲載している。詳しくは、李英華『崔南善의 歷史學』景仁文化社、二〇〇三、一一九—一二〇頁參照。
- (29) 公六(崔南善)「轉載하면서」『少年』第三年第八卷、一九一〇年八月、附録二頁。
- (30) 朝鮮人の刊行物に對しては、併合以前より事前檢閲が實施されていた(朝鮮總督府編『施政二十五年史』一九三五、三六—三七頁參照)。
- (31) 荻生茂博『近代・アジア・陽明學』ペリかん社、二〇〇八、四四七頁參照。
- (32) 詳しくは、松田利彦『日本の朝鮮植民地支配と警察』一九〇五—一九四五年』校倉書房、二〇〇九、一五—一五四頁參照。
- (33) 「인사 엮음」『봄은 저고리』第一年第一號、一九一三年一月、一頁。
- (34) 崔南善「學藝增刊에對하야諸君의協贊을厚望함」『少年』第三年第八卷、一九一〇年八月、六一頁。
- (35) 吳天錫著、渡部學・阿部洋譯『韓國近代教育史』高麗書林、一九七九、二四九頁、古川宣子「朝鮮における普通學校の定着過程—一九一〇年代を中心に」『日本の教育史學』三八、一九九五、一八二頁。
- (36) 「엮음을 말슴」『봄은 저고리』第一年第二號、一九一三年一月、一頁。
- (37) 誌面には、繪の授業を受けた普通學校の一年生(우슴거리)「봄은 저고리」第一年第四號、一九一三年二月、六頁)や、普通學校で「算術」の勉強に勵む生徒(도슴된 이야기)「봄은 저고리」第一年第七號、一九一三年四月、六頁)などが登場する。
- (38) 「아이들의본」『아이들보이』第九號、一九一四年五月、三三—三四頁。
- (39) 「이 신문 내는 의사」『봄은 저고리』第一年第四號、一九一三年二月、附録二頁。
- (40) 「날남」は「鍛える」という意味の「머리다」と同義だが、「용기(勇氣)」の代わりに崔南善が新しく作りだした言葉であるとの指摘がみられる(具仁瑞「一九一〇年代未成年讀書物の 한글 글쓰기 様相研究」新文館發行、定期刊行物을 중심으로」『우리文學研究』三三、二〇一一、二六七頁)。實際、崔は「아이들보이」掲載記事において底本の「度胸」を「날남」と譯していることが確認できる(『남생이 줄다리기』『아이들보이』第一號、一九一三

- 年九月、三頁)。よって、本稿では「勇氣」や「度胸」の意味で解釋する。
- (41) 『봄은 저고리』第一年第四號、一九一三年二月、五頁。
- (42) たとえば、「밤도 별별 떠는 뛰어난 날면」『아이들보이』第五號、一九一四年一月、一九二〇頁、「울은 일흔압 해 날년을 바림」『아이들보이』第一號、一九一四年七月、一六〇一七頁などが挙げられる。
- (43) 『아이들신문——말슴』『아이들보이』第八號、一九一四年四月、三四頁。
- (44) 『아이들신문——말슴』『아이들보이』第九號、一九一四年五月、二八頁。
- (45) 『編輯室通寄』『少年』第一年第一卷、一九〇八年十一月、八三頁。
- (46) 『아이돌울보이』の廣告にも、毎號懸賞を實施すると記載されている(前掲『新文館發賣書籍總目錄』、四頁)。
- (47) 『이 신문 내는 의사』『봄은 저고리』第一年第四號、一九一三年二月、附錄二頁。
- (48) 前掲『新文館發賣書籍總目錄』、四頁。
- (49) 崔南善「童話와文化——『안더센』을 懷함」『東亞日報』一九二五年八月二二日附、一面。
- (50) 詳しくは、拙稿、前掲「崔南善の初期の出版活動にみられる日本の影響」参照。
- (51) 趙谷萬によると、『赤いチョゴリ』廢刊後に編集者の金興濟は東京へ留學し、崔南善も後を追って東京へ渡ったという(趙谷萬、前掲『六堂崔南善』、一一七頁)。
- (52) 한샘「아이들신문 동경에서」『아이들보이』第一〇號、一九一四年六月、三三頁。
- (53) とくに、崔南善は第二次留學中に、兒童向けの刊行物を多數發行していた博文館が所有する大橋圖書館に通ったとされ(秦學文「六堂이 걸어간 길」『思想界』第五八號、一九五八年五月、一五四頁)、その際に複数の博文館の兒童雜誌等を目にしたことが推測される。
- (54) 山縣悌三郎「兒孫の爲めに余の生涯を語る」弘隆社、一九八七、一一〇頁。
- (55) 同右、一一九頁。
- (56) 『이 신문 내는 의사』『봄은 저고리』第一年第四號、一九一三年二月、附錄一頁。
- (57) 『아이들보이』第二二號、一九一四年八月、卷頭廣告。
- (58) 松山鮎子「巖谷小波の「お伽噺」論にみる明治後期の家庭教育と〈お話〉」『早稻田教育論評』二六一、二〇二、二〇七頁。
- (59) 巖谷季雄(小波)『桃太郎主義の教育』東亞堂書房、一九一五、一一六頁。
- (60) 詳しくは、拙稿、前掲「崔南善の初期の出版活動にみられる日本の影響」参照。
- (61) 先行研究では、原作は特定できていないが推測されているものもある。たとえば、鄭惠原「一九一〇年代 兒童媒體에 具現된 兒童像研究——翻案童話를 중심으로」『韓國兒童文學研究』一五、二〇〇八では『아이돌울보이』第五號の「프레디의 장강이」はグリム童話の「三つの願

い」を一部借用したものと指摘されているが、底本である『世界お伽噺』によると、これは「『世界口碑集』(米國出版)の瑞典」の部掲載の「小さきフレッドと其の胡弓」が原作である。また、同論文では第七號の「깃걸이 아씨」はアンデルセンの「まぬけなハンス」、第八號の「거짓아님 참아님」は「王子と乞食」が原作で、さらに第一號の「병부자」はグリム童話の「幸せなハンス」を一部借用したものとしているが、實際はそれぞれ「『世界口碑集』(米國出版)」の「諸威の部」掲載の「誰も黙らせ得ぬ王女」と「オットウ氏のメルヘル集」の「イワン王子と勇敢なる郎黨ブラウトに就て」、「カル、クノルツ氏の編纂した、『愛蘭土お伽噺』」掲載の「徳利の山」がその原作である。

(62) 【表1 翻譯作品の底本一覽表】は、崔南善が日本に滞在していた一九〇四年から、新文館の兒童雜誌が刊行されていた一九一〇年代前半の間に日本で刊行された兒童向けの雑誌や書籍等を中心に分析したものであり、翻譯の底本には一九〇四年以前に刊行されたものも含まれている。また【表1】では、翻譯のされ方を詳細に分析するために、できる限り節ごとに区切っている。空欄は無署名のものであり、翻譯底本の頁数は、全體ではなく翻譯が確認できる部分のみを表記した。なお、【表1】は今回筆者が確認した限りであり、新文館の兒童雜誌の翻譯作品および底本を網羅したものではない。

(63) 和田垣謙三、星野久成共譯「緒言」『家庭お伽噺』小川

尚榮堂、一九〇九、一―二頁。

(64) 巖谷小波『世界お伽噺』第一編、博文館、一八九九、六頁。

(65) 大竹聖美は、方定煥の『사랑의선물』(開闢社、一九二二年)掲載の「요술왕 아아」の原作は巖谷小波の『世界お伽噺』に掲載されたイタリアの民話「魔王ア、」であるとし、「小波の文章を通して、朝鮮の子どもたちに西洋の童話をはじめで紹介したのが、小波・方定煥であった」と指摘している(大竹聖美「植民地朝鮮と兒童文化―近代日韓兒童文化・文學關係史研究」社會評論社、二〇〇八、一〇六頁)。しかし、本稿で述べたように崔南善はすでに一九一〇年代に小波の『世界お伽噺』を翻譯していた。

(66) 百島操(冷泉)「序」『赤靴物語』内外出版協會、一九〇八、冒頭。

(67) 巖谷小波「凡例」『學校家庭教訓お伽噺(東洋之部)』博文館、一九一二、冒頭。

(68) いくつか具體例を挙げると、『新譯伊蘇普物語』(鍾美堂書店、一九〇七年)の「西班牙の諺にも、『頭巾で顔隠すより、草や薊を食つた方が優』と云いまして、いくら貧乏でも、道ならぬ富貴に比べてわ、何のくらい立派であるか知れません」という部分が削除され、また「西洋の諺にも、『百姓の靴についた土わ、島の中でも一番肥えた土』と言います」という箇所が「내 일에 남의 손을 빌려 하야 반드시 내 뜻가치 되란 법이 업느니(他人の手を借りて必ずしも自分の思い通りになるとは限らないので)」と譯される

などしている。そのほか、朝鮮の状況に合わせた言い換えとしては、『家庭お伽噺』掲載の「四人兄弟」の「解説」における「一家に在て兄弟一致すれば其家榮へ、一國に在て人民相一致すれば其國榮えるものです」の部分が「**무슨 일이든지 여러 사람이 각기 재조를 모아 한결가튼 마음으로 하면 반드시 아름다운 뒤꿈치 잇슴내다** (何事も、人々が力を合わせ一途な心で行えば有終の美を飾ることができます)」と譯されている箇所などが挙げられる。

- (69) 底本における「太郎さん」が「**친수** (チンス)、七百三十八年」が「우리 四〇七一年 (檀紀四〇七一年。檀紀とは、朝鮮神話の最初の王である檀君が即位した西暦紀元前三三三三年を元年とする紀年法である——筆者)」、「**大名**」が「**량반** (兩班)」と表現されるなどしている。

- (70) 「**다음 엮지**」『**붉은 저고리**』第一號、一九一三年一月、五頁。

- (71) 趙銀淑、前掲「一九一〇年代 兒童新聞『**붉은 저고리**』研究」、一一六頁。

- (72) 幼年を対象とした繪本と讀み物を兼ねた色刷りの繪雜誌で、創刊當初は巖谷小波が監修し木村小舟が編集を擔當していた。次第にボンチ畫が登場するようになった (大阪國際兒童文學館編『日本兒童文學大事典』第二卷、大日本圖書、一九九三、六二四頁)。

- (73) 幼稚園から小學校低學年を対象とした月刊繪雜誌であり、尙友館發行の月刊繪雜誌『家庭教育繪ばなし』(一九〇五年創刊)を一九〇七年四月から實業の日本社が引き受け、

一九〇九年一月から『幼年の友』に改題された。内容は、繪物語・童話・詩・漫畫等である (前掲『日本兒童文學大事典』、六二五～六二六頁)。

- (74) 【表2 「**다음 엮지**」の轉載元】以外のものも、現存しない日本の兒童雜誌もしくは少年雜誌等に掲載されたものを参照した可能性がある。

- (75) 小中學生や働く少年の良き良師となることをねらいに創刊された。博文館の『少年世界』や時事新報社の『少年』など既存の少年雜誌と覇を争い、三誌が鼎立するかたちとなった。明治・大正・昭和三代にまたがる代表的な少年雜誌であった (前掲『日本兒童文學大事典』、六〇二頁)。

- (76) 教育的な編集方針を特徴とする少年雜誌で、通卷二三號まで確認できる。全體的には、他雜誌に比してとくに斬新なところを指摘するのは難しく、品位のある雜誌といわれたが大きく飛躍するまでには至らなかったと評價されている (前掲『日本兒童文學大事典』、五六六頁)。

- (77) そのほか、『少年世界』掲載の「少年笑話」から數篇翻譯していることも確認できる。詳しくは【表1 翻譯作品の底本一覽表】を参照。

- (78) 「**國定教科書練習雜誌**」と銘打っているが徐々に文藝色を出した。主な執筆者は幸田露伴、葛原鹵、佐々木邦、竹久夢二らであった (前掲『日本兒童文學大事典』、五五七頁)。

- (79) 「小學新聞」掲載の「虎と雀」という童話が『アイドゥルボイ』第六號 (一九一四年二月) および第七號 (一九一

- 四年三月)の「아이들신문」に載せられている。詳しくは【表1 翻譯作品の底本一覽表】を参照。
- (80) 【表1 翻譯作品の底本一覽表】で示したように、「小學生」第四卷第三號(一九一四年二月)の「液體空氣と液體酸素」という記事が「아이들보이」第七號(一九一四年三月)に翻譯掲載されている。
- (81) たとえば、博文館刊行の少年雜誌「少年世界」を『少年』では形式面のみ参照しているが、「赤いチョゴリ」においては掲載記事が翻譯して載せられている。
- (82) 崔南善は、鄭夢周を幼い頃から兩親の善良な教育を受け「正しくたくまし」く成長した人物として(『일흔난이』『붉은 저고리』第一年第四號、一九一三年二月、七頁)、金時習を持って生まれた才能を磨いて開花させた人物としてそれぞれ紹介している(『일흔난이』『붉은 저고리』第一年第五號、一九一三年三月、七〜八頁)。なお、崔は鄭夢周の紹介においては初名の「鄭夢蘭」を用いている。
- (83) 張貞姬「朝鮮童話의 近代的 採録過程研究——一九一三〜二三年 近代媒體의 옛이야기 收集活動」『韓國學研究』五七、二〇一六、三〇七頁。『아이들보이』の昔話收集運動は、一九二〇年代に開闢社で展開される昔話や童話の收集運動につながるとの指摘がみられる(同右、三一〇頁)。
- (84) 「상글루주는 이익이 모음 광고」『아이들보이』第二號、一九一三年一〇月、一七頁。
- (85) 「상글루주는 이익이 모음」『아이들보이』第三號、一九一三年一月、三四頁。
- (86) 併合以前の「少年」には「太白山詩集」や「初等大韓地理稿本」といった朝鮮の地理を扱った作品等が収録されている。また、朝鮮の傳説上の始祖とされる檀君に對する認識が「少年」からみられるようになることが指摘されるなど(李英華、前掲『崔南善의 歷史學』、一三三頁)、「朝鮮的なもの」に對する意識は以前から有していたものと思われるが、それがより顯著に表れるようになるのが併合後である。
- (87) 朝鮮光文會に關して、詳しくは、柳時賢、前掲『崔南善研究』、五八〜六七頁参照。
- (88) 崔南善「書齋閑談」『새벽』送年號、一九五四年二月、四一頁、「朝鮮光文會廣告」『少年』第三年第九卷、一九一〇年一二月、卷末。
- (89) 「아이들신문 광고」『아이들보이』第五號、一九一四年一月、三二頁。
- (90) 「六錢小説」に關して、詳しくは、崔皓哲「新文館刊行『六錢小説』에 대한 研究」『韓民族語文學』五七、二〇一〇参照。なお、當時において六錢の單行本というのは廉價であり、「六錢小説」は商業的な利益を目的としていた可能性もある。
- (91) 『홍길동전』新文館、一九一三、卷頭廣告。
- (92) 한샘「동경에서」『아이들보이』第一〇號、一九一四年三月六日、三三頁。ここでの「博覽會」とは、一九一四年三月二〇日より七月三十一日にかけて東京市の上野公園地で開催

された「東京大正博覽會」を指すと思われる。東京大正博覽會とは、「第一に大正御即位を紀念し、併せて我帝國の改元に伴ふ萬般の進歩發達を圖り聊かなりとも、此大正の御代に報ひ奉らんとするの赤心より企圖せられた」ものである（東京大正博覽會協賛社編『東京大正博覽會遊覽案内』東京大正博覽會協賛社出版部、一九一三、六〇～六一頁）。

- (93) 한샘 「애씀」 『아이들보이』 第二號、一九一三年一〇月、二〇～二二頁。
- (94) 「아이들신문 말씀」 『아이들보이』 第一〇號、一九一四年六月、三二頁。
- (95) このような、兒童雜誌における朝鮮の昔話の収集や偉人の紹介は、一九一五年以降顯著にみられる崔南善の古代史および朝鮮の文化の獨自性を強調する姿勢へとつながっていくといえる。崔は『青春』第六號（一九一五年三月）の「古朝鮮의支那沿海植民地」を契機に古代史に關する論說を多數發表するようになる。また、『青春』掲載論說には朝鮮固有の文化を評價する傾向が見受けられ、一九一六年に『毎日申報』に掲載された複数の論說においても、古代における朝鮮文化が日本に及ぼした影響を指摘している。
- (96) 「한글 풀이 한글 새 로 쓰는 까닭」 『아이들보이』 第一〇號、一九一四年六月、四三頁。
- (97) 趙谷萬、前掲『六堂崔南善』、一一九頁參照。
- (98) 「松魚」は崔南善による原註である。
- (99) 一例として『世界お伽噺』第七三編掲載の「綱引の力」という童話の『アイドゥルボーイ』における翻譯のされ方を分析すると、底本に出てくる單語のほとんどを固有語で言い表していることがわかる（남생이 줄다리기」 『아이들보이』 第一號、一九一三年九月、二〇～二二頁）。
- (100) 「이슴의 이약（第一次）」 『少年』 第一年第一卷、一九〇八年一月、二六～二七頁および「이슴의 이약（第二次）」 『少年』 第二年第一〇卷、一九〇九年一月、二四～二五頁。
- (101) 「양의 가족을 쓴 이리」 『붉은 저고리』 第一年第五號、一九一三年三月、六頁および「한머니와 종아리」 『붉은 저고리』 第一年第一〇號、一九一三年五月、四頁。
- (102) 「상급잇는 글꼬르기」 『아이들보이』 第一號、一九一三年九月、三九頁。
- (103) 朴珍英は、『青春』の表紙を擔當した高義東が『아이들보이』第二三號の表紙を描いた可能性が高いとしている（朴珍英、前掲『책의 誕生과 이야기의 運命』、八二頁）。
- (104) 「이번이 한돌」 『아이들보이』 第一三號、一九一四年一〇月、一頁。
- (105) 金根洙、前掲『韓國雜誌概要 및 號別目次集』、一一九頁。
- (106) 『青春』の對象讀者が「中學生」であったという點に關しては、권보드래 「少年」・「青春」의 힘과 日常의 再編」 권보드래 他 『少年』 과 『青春』 의 장——雜誌를 통 해 본 近代初期의 日常性』 梨花女子大學校出版部、二〇

○七、第二章参照。なお、當時の朝鮮では朝鮮人が通う中等教育機関は高等普通学校と呼ばれたが、『青春』においては意圖的に「中學校」という言葉が使われている。

- (107) 『セビヨル』の創刊號の刊行年月は明らかになっていないが、『アイトゥルボイ』と『セビヨル』の「第三種郵便物認可」の日附はどちらも一九一三年九月五日であり、『アイトゥルボイ』創刊號の發行日も同一であるため、「一九一三年九月五日」の可能性が高いとされる(朴珍英、前掲『책의 誕生과 이야기의 運命』、六五頁)。ちなみに、『少年』の場合も「第三種郵便物認可」の日附および創刊日は同一である。また、趙容萬によると崔南善自身『セビヨル』に關しては記憶が曖昧で、何號まで出したのか覚えていなかったといひ(趙容萬、前掲『六堂崔南善』、一二二頁)、いつ廢刊になったのかも不明である。第一六號には「許生傳(上)」が収録されており、第一七號以降には「許生傳(下)」が掲載された可能性があることなどから、少なくとも第一六號發行時に廢刊を豫定していたわけではないと思われる(朴英琦、前掲『一九一〇年代 雜誌『새별』研究』、九二頁)。
- (108) 趙容萬によると、崔南善が李光洙に『セビヨル』を發行させたという(趙容萬、前掲『六堂崔南善』、一二〇頁)。先行研究のなかでは、李が編集に携わったとの指摘がみられる一方で(崔鍾庫「春園 李光洙의 童詩世界」『兒童文學評論』三九―四、二〇―四、二三頁等)、その點を疑問視する見方もある。たとえば、朴珍英は李が編集を受け

持ったという點に關して實狀の把握は困難であるとし、『セビヨル』は崔が一人で企劃、編集したものとみなしている(朴珍英、前掲『책의 誕生과 이야기의 運命』、六五・八二頁)。なお、李光洙は兒童文學の擡頭期における重要人物に擧げられ(李在徹、前掲『韓國現代兒童文學史』、五八―六一頁)、一九一〇年代の論說には理想的な主體である「幼い人」へ注目する姿勢が表れているという(김성연「李光洙의 兒童文學研究」『童話와 翻譯』八、二〇〇四、二頁)。

- (109) 『青春』第三號、一九一四年二月、卷末廣告。

- (110) 朴英琦、前掲『一九一〇年代 雜誌『새별』研究』、一一六頁。

- (111) 松本赴(雪舟)「序」『家庭物語』婦人之友社、一九一三、二頁。

- (112) 『青春』第三號、一九一四年二月、卷末廣告。

- (113) 崔南善「한국의 문단의 초창기를 말함」『現代文學』第一號、一九五五年一月、三八頁。

- (114) 「今月の青春」『새별』第一五號、一九一四年二月、一七頁。

- (115) 『アイトゥルボイ』第一三號において崔南善は「글씨나 기」や「이야기 모음」といった讀者投稿を今月よりしばらく休止すると述べており(「이번이 한 달」『아이들보이』第一三號、一九一四年一〇月、一頁)、少なくとも第一二號までのような多様な内容のものは、第一三號以降出すつもりはなかったものと思われる。

- (116) たとえば、創刊号では「レ・ミゼラブル」が翻譯掲載されているが〔世界文學概観 너참량상타〕『青春』第一號、一九一四年一〇月、特別附録一～三六頁)、朴趾源の『燕巖外傳』という朝鮮の古代小説も合わせて収録されている〔涉獵小抄〕『青春』第一號、一九一四年一〇月、一三六～一四三頁)。
- (117) 「我等은世界の甲富」『青春』第七號、一九一七年五月、五二～六二頁。そのほか、「飛行機의 創作者은朝鮮人이다」〔青春〕第四號、一九一五年一月、五～一五頁)、「藝術斗勤勉」〔青春〕第一號、一九一七年一月、二七～四八頁)などが挙げられる。

附記…本稿における『幼年畫報』の圖版は大阪國際兒童文學館に提供していただいた。記して謝意を表したい。また、本稿は二〇二〇年度日本學術振興會科學研究補助金(特別研究員獎勵費 1912318)による研究成果の一部である。

since the 17th century, we must consult the *Joseonwangjo Sillok* 朝鮮王朝實錄, a chronicle, the *Seungjeongwong Ilgi* 承政院日記, records of the official scribes of the king, and the *Bipyeonsa Deunglok* 備邊司謄錄, a record of the highest-ranking deliberative body. Although *SJW Ilgi* has the most detailed description of the Byeongja War, the existence of original historical sources in the form of journals has now become clear.

One of these sources is the *Namhan Ilgi* 南漢日記, which was thought to have been written by Seok Jihyeong 石之珩. However, this diary was not written by Seok Jihyeong, it was a diary written by Juseo, the official scribe of the *SJW*. Twelve manuscripts of this diary have been preserved. As research progresses, the number of manuscripts is likely to increase further. These manuscripts can be divided into two categories: those from the Seoul National University Kyujanggak Institute for Korean Studies and those from the National Library of Korea. From an analysis of the entry for the 27th day of the twelfth month of 1636, it is probable that the version held by the National Library was created with reference to the book held by the Kyujanggak.

The other source is the *SJW Ilgi* of Yi Dojang 李道長, which was created at the same time as the *Namhan Ilgi*. This journal was published by the Academy of Korean Studies Jangseogak in 2010. Because it is a personal diary, it has less information than the *Namhan Ilgi*. However, it sometimes contains information that is not found in the *Namhan Ilgi*. In particular, the entry for 14th day of the twelfth month of 1636 found at the beginning of this record is missing from the *Namhan Ilgi*. From this source, we can learn in detail how Injo escaped from Seoul at that time.

It can be anticipated that study of these historical records will further elucidate the facts of the Byeongja War.

SHINMUNGWAN'S MAGAZINES FOR CHILDREN IN 1910'S KOREA : CHOI NAM-SEON AND THE WORLD OF CHILDREN'S LITERATURE IN JAPAN

TANAKA Mika

Shinmungwan 新文館, the publishing company established in 1908 by Choi Nam-seon 崔南善 (1890-1956), who is well-known thanks to his role in drafting the March First Declaration of Independence, is the most researched area in the field of

historical studies of print culture in modern Korea.

Shinmungwan, in particular, is famous for the magazines *Sonyun* 少年, which was published in 1908 and which is referred to as 'the first modern magazine in Korea,' as well as the general education magazine *Cheongchun* 青春, which gained popularity in the 1910s. However, Shinmungwan also published children's magazines such as *Bulgeun Jeogory* 붉은 저고리, *Aideulboi* 아이들보이 and *Saebeol* 새별 between editions of *Sonyun* and *Cheongchun*.

Although these magazines are currently regarded as the historical starting point of Korean children's literature, constraints on accessing historical sources has meant that little work has been done on them until recent years; many mysteries about Korean children's literature remain unresolved. This study examines the process of the publication of these magazines with reference to contributing factors such as domestic circumstances in Korea at that time and the influence of foreign countries.

The situation in Korea at the time included censorship by the Japanese military rule in the 1910s and a slump in the publishing business, which meant that the production of children's reading material was very rare.

An analysis of these magazines shows that their content was created with reference to several Japanese publications. It is possible to say that these children's magazines were a product of the combination of internal factors related to the circumstances in Korea at that time and the external factor from the world of Japanese children's literature.

As can be seen by the comparatively large percentage of the content that was allotted to articles about Korean tradition in addition to translated articles, Choi Nam-seon tried to preserve Korean traditions and culture, which he was concerned would be lost due to the annexation of Korea, and he simultaneously tried to instill pride about Korea in children. These attempts are visible in the magazine, which is characterized by the use of Hangul and the creation of new Korean words.

Due to the fact that Shinmungwan changed its objectives and raised the target age for the magazines, it is thought that Shinmungwan's magazines for children had fulfilled their role with the publication of volume 13, the last volume of the children's magazine *Aideulboi*. However, Choi Nam-seon's endeavors to try to publish Korean articles and instill national pride in his readers continued.